

ISSN 1881-3879

JAPAN BEAR NETWORK

BEARS JAPAN

Vol.24-1 June. 2023



This Number

2022年度のクマ事情

Bear Scene

■ 今号のクマ写真

撮影地：北海道幌延町 問寒別

撮影者：大石 智美さん（北海道大学農学部）

「ミズバショウを食べにきたヒグマ」



ヒグマは春から夏にかけて、ミズバショウの地下部を掘って食べるそうです。サトイモ科のミズバショウ。里芋のような味がして美味しいのでしょうか。人間には毒なので、答えはクマのみぞ知る。このあと、バリバリとなぎ倒しながら通り過ぎて行きました。



今号の表紙イラスト

「クマ事情 in Japan」

今号は、日本各地の**2022年度**のクマ事情が特集ということで、クマに関連するさまざまな問題を日本列島の中に描きました。

何が書かれているのか見て楽しみながら、クマ事情について考えていただけたらと思います。

蜂矢 愛 (東京農工大学)



People

フィールド調査のエキスパート
うんち探偵と言えはこの人！

ミュージアムパーク茨城県自然博物館

後藤 優介 氏

ごとう ゆうすけ

博物館学芸員。学生時代から東京農工大学でツキノワグマの調査研究に参加し、その後もクマの研究に携わりつつ、富山県立山カルデラ砂防博物館の学芸員を経て、現職に至る。

好きなことは採って食べることで、調査や通勤の合間に釣った魚や採った植物を食べることに興じる。近頃はその機会が減り、身近な生きもの観察を楽しむ。



ロシアで捕獲した麻酔作業中のヒグマと

——クマに関わるようになったきっかけは何ですか？

東京農工大学に入学した私は漠然と森林の中の植物と動物の両方に興味をもち、1年生のころから、植物やニホンジカ、猛禽類等の様々な調査の手伝いをさせてもらっていました。3年生になると、古林賢恒先生の研究室に所属する小池伸介さん（現：東京農工大教授）、葛西真輔さん（現：ワイルドライフプロ）、当時、茨城県自然博物館所属だった山崎晃司さん（現：東京農大教授）らが進めていたクマの研究に参加させてもらうようになり、そこで奥多摩で学術捕獲されたツキノワグマを初めて見ました。その際、黒光りする美しい毛並みに感動したことが、きっかけだったように思います。ただ、その後はクマの糞を探しながら山をどれだけ歩き回っても、野生のクマには一向に出会えず、直接見られないならもうやめようかと思いついた矢先に、濃霧が立ち込めた森の中で、ばったり遭遇し

ました。その時の凛としたクマのたたずまいと、自分よりも圧倒的に力の強い動物への畏敬の念と恐怖心が入り混じった不思議な感覚に、「この生き物のことをもっと知りたい！」とのめり込んでいきました。

——学生時代はどんな研究に取り組まれていましたか？

足尾山地でツキノワグマに初めて装着したGPS首輪から得られた行動データと、秋田県阿仁町のクマ牧場で実験させて頂き算出した、果実を食べるから種子がうんちに出てくるまでの時間（体内滞留時間）とを掛け合わせて、クマが種子を散布する距離の確率（シードシャドウとも呼ぶ）を算出することを卒論としました。修士では、小坂井千夏さん（現：農研機構）が加わり足尾山地で、クマの直接観察とGPS首輪のデータを照合させることに取り組み始めましたが、ブナ林に生息するク

マの生態を追うことにかねてから憧れがあり、ちょうど機会があった富山県の立山周辺に調査地を移しました。3,000m級の山々がつらなる北アルプスでの調査は、多くの困難も伴いましたが、とても刺激的でした。当時のGPS首輪は、データが首輪に蓄積されるタイプであったため、首輪を回収しないと位置情報が得られませんでした。この首輪でどこまで細かいクマの行動を明らかにできるか検証するため、測位間隔を最短の5分間隔に設定し、その場合の電池寿命である2週間後に首輪を回収して、その間にクマが活動や休息した場所を実際に歩いて痕跡を見つける研究に取り組みました。

——学芸員になられたきっかけを教えてください。

立山における調査をきっかけに、富山県立山カルデラ砂防博物館の学芸員として勤務する機会を得ました。年間40回

以上の自然観観察会を計画・実施しながら、そのフィールドはまさにクマの生息地の中であったため、クマの生態を調べ、それを参加者に伝えることを中心に活動していました。ここで9年間勤務した後、現在の茨城県自然博物館に移っています。

——学生の就職先として学芸員は人気の職種の一つだと思えますが、学芸員になるための方法がありますか？

学芸員は集めること（資料収集）、調べること（調査研究）、それらを伝えること

（教育普及）に興味がある方に向いていると思います。いずれにせよ、全国の博物館の学芸員の方々を見回してみると、好奇心が強く、とにかく自分が面白いと思ったことをとことん追求する、そしてそれを人に面白そうに伝える人が多いように思います。なので、自分が興味を持った分野では、「このことについては、誰にも負けない！」と言える部分を追求することが学芸員になる近道かもしれません。

——学芸員の業務とクマ研究を両立させる難しさはありますか？

現在の所属は茨城県立の博物館ですが、残念ながら茨城県にクマはいません。そのため、茨城県の在来哺乳類の分布の変遷や、新たに侵入した外来哺乳類の動向把握、来館者対応、企画展の製作などに追われ、クマの研究にさける時間は少ないのが現状です。学生のころよりフィールドにしていた、奥多摩、足尾山地での研究プロジェクトにも参加していますが、自分で山中を歩

く時間が取れなくなったことは、残念なことです。山崎さんとロシアのクマについて研究する機会も得ましたが、社会的な制約により中断せざるを得なくなっています。その代わりではないですが、当館で年3回、テーマを変えて実施している企画展ではことあるごとにクマを展示しています。ブナの豊凶とクマの行動（ブナ展）、種子散布者としての役割（果物展、サクラ展）、世界のクマ8種の紹介（コレクション展）、文学

となったクマ（宮沢賢治展）など、クマには多様な魅力があることを再認識しつつ、それらを多くの方に伝える機会が得られるのは学芸員冥利と言えます。今夏、7月8日から開催予定の企画展「うんち無しでは生きられない！」では、もちろん、ふんだんにクマの糞を展示する予定です(笑)。また近年は茨城県の北部で福島県側から侵入していると考えられるクマの情報が始まっており、注目しています。

——YouTube企画も拝見しました。企画の中で、うんち探偵がレクチャーするうえで意識されたことはありますか？

今回は「伝えること」のプロであるWoWキツネザルさんとのコラボでしたので、自分がこうしたら良いと思う意見はなるべく控えるよう、心掛けました。そのおかげで、見る人が興味を

持つことを優先して内容を決めていく手法などの勉強になり、自分では思いつかない新鮮な切り口で実施できたかと思います。でも、伝えたいネタが多すぎて、半分ぐらいしか紹介できませんでした。

——最後に、クマの魅力をズバリ教えてください。

嗅覚も腕力も、山を歩く能力も人間より圧倒的に優れた動物ですが、その体の大きさや食べ物など人間と共通する部分も多いと感じます。クマの生き方を見



▲世界のクマ8種を紹介した展示（企画展「ミュージアムパーク・コレクション」より）

興味を持った分野を追求することが、学芸員への近道

つめることで、自然の中での自分の生き方を見つめることにも繋がるのが、クマの魅力の一つでしょうか。

文中でご紹介頂いた企画展「うんち無しでは生きられない！」は7/8～9/18より茨城県自然博物館にて開催予定なので、ぜひ足を運んではいかがでしょうか！詳しくは、以下QRコードのHPを参照ください。



This number 2022年度のクマ事情



撮影：稲垣亜希乃

★毎年度のニュースレター第1号で恒例の、日本全国のクマに関わる情報を整理してお伝えする「クマ事情特集」です。おとし2021年度は北海道の大都市で出沒が大幅に増加し、大きな問題となりましたが、いわゆる大量出沒と呼ばれる秋の出沒は起こらず、各地区からは比較的穏やかな状況だったと報告が多くありました。本号でお伝えする、昨年度2022年度も全体的には比較的穏やかな年だったといえるでしょう。しかし、北海道や東北など、地域によっては市街地への出沒が目立ってあったり、西日本のこれまで出沒が多くなかった地域で近年の出沒が増加傾向にあります。各地で人家や農地、その周辺での人身事故も発生しています。誘引物の除去や藪の刈払いなどの出沒させないための対策や、出沒時の体制整備や机上訓練の実施等、平時からの備えが必要かつ重要です。

(編集責任：小坂井 千夏)

全国の状況・・・P5～7 環境省が発表している全国のクマ類の捕獲、出沒、人身事故の情報（右側QRコード，最終確認2023年5月16日）や農林水産省が発表する農業被害の状況について、近年のトレンドを整理しました。



JBNクマ保護管理推進委員長・小坂井 千夏（農研機構）

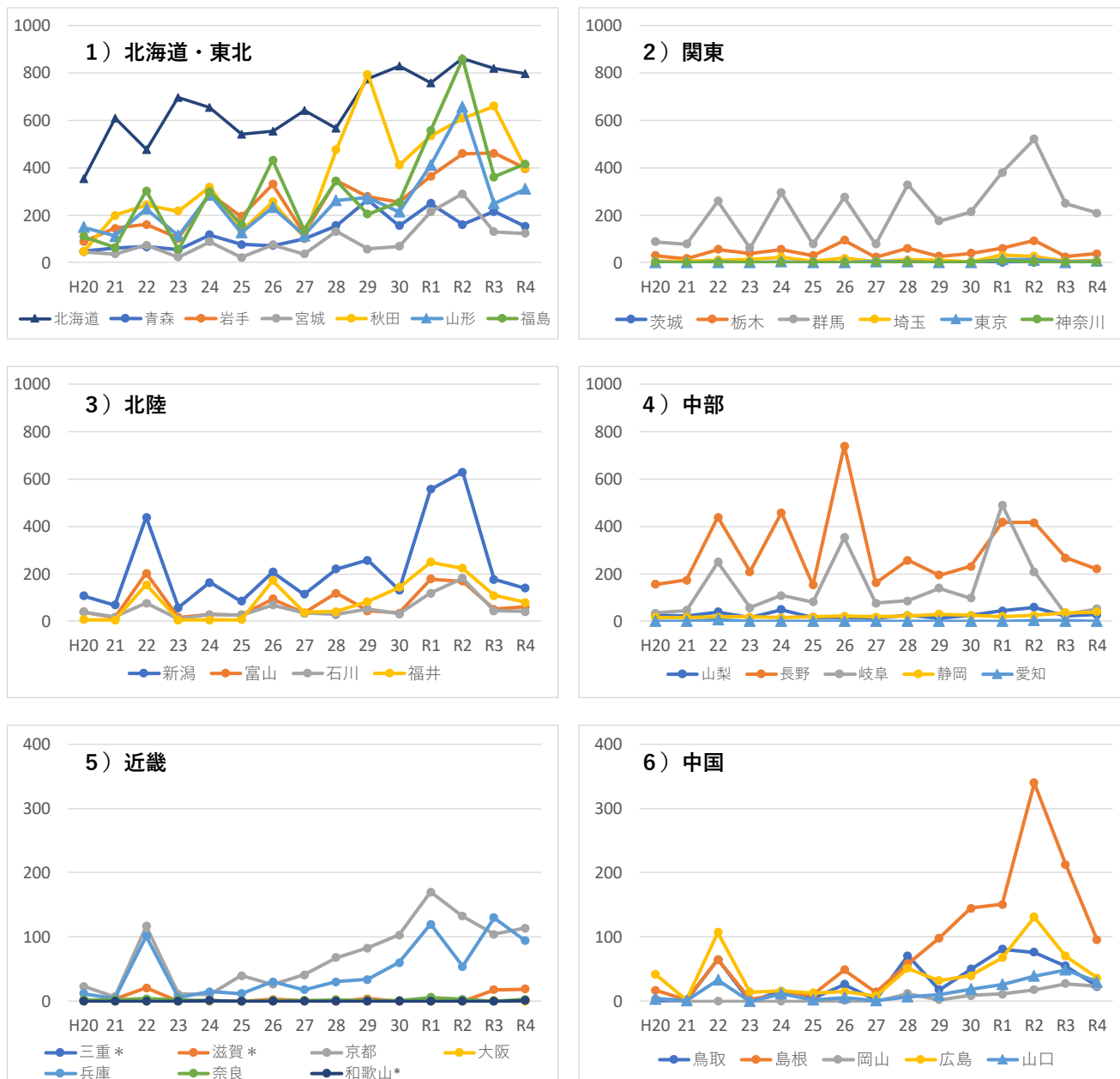


図1 平成20/2008～令和4/2022年度のクマ類の捕獲数(頭)

- 環境省webサイト（2023年5月16日付）の情報より。令和4/2022年度は2023年3月時点の速報値。
- 捕獲数は許可捕獲数（有害鳥獣捕獲と数の調整捕獲で、捕獲後に放獣された頭数も含めた合計値）
- 2022年度の捕獲数が「過去5年間の平均値×1.4」より多い都道府県名に*印を付けた（この基準は「ツキノワグマの大量出沒に関する調査報告書（自然環境研究センター2005）」と同一）

過去5年間に比べて、2022年度の捕獲数が多かったのは3県のみにでした。

- ・三重県（1頭）
- ・滋賀県（19頭）
- ・和歌山県（1頭）

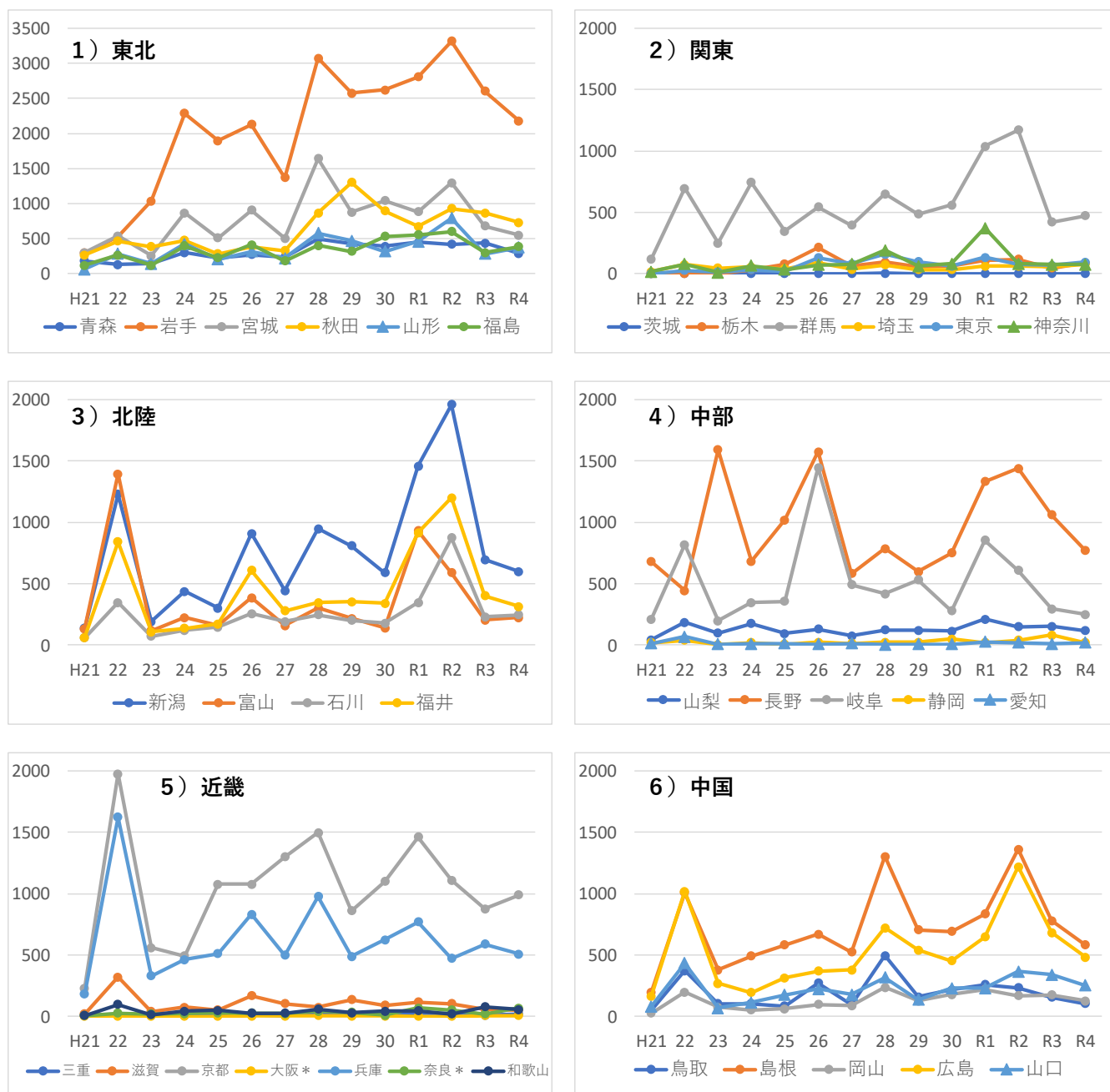


図2 平成21/2009～令和4/2022年度のツキノワグマの**出没情報数**

- 環境省webサイト（2023年5月16日付）より。
- 都道府県毎に異なる方法で集計（警察への通報件数、市町村からの情報等）。
- 長野県のデータについて。上記の環境省発表の情報ではH28年度までの値は「里地と山地」での目撃数、H29年度以降は「里地のみ」での目撃数となっている。本グラフはH28年度以前も「里地の目撃数」を、長野県のwebサイト（下部QRコード）から引用して使用した。
- 北海道は平成28/2016年度以降、道としての出没数の公表がない。

過去5年間に比べて
2022年度の出没情報
数が多かったのは2府
県でした。

- ・大阪府（7件）
- ・奈良県（70件）



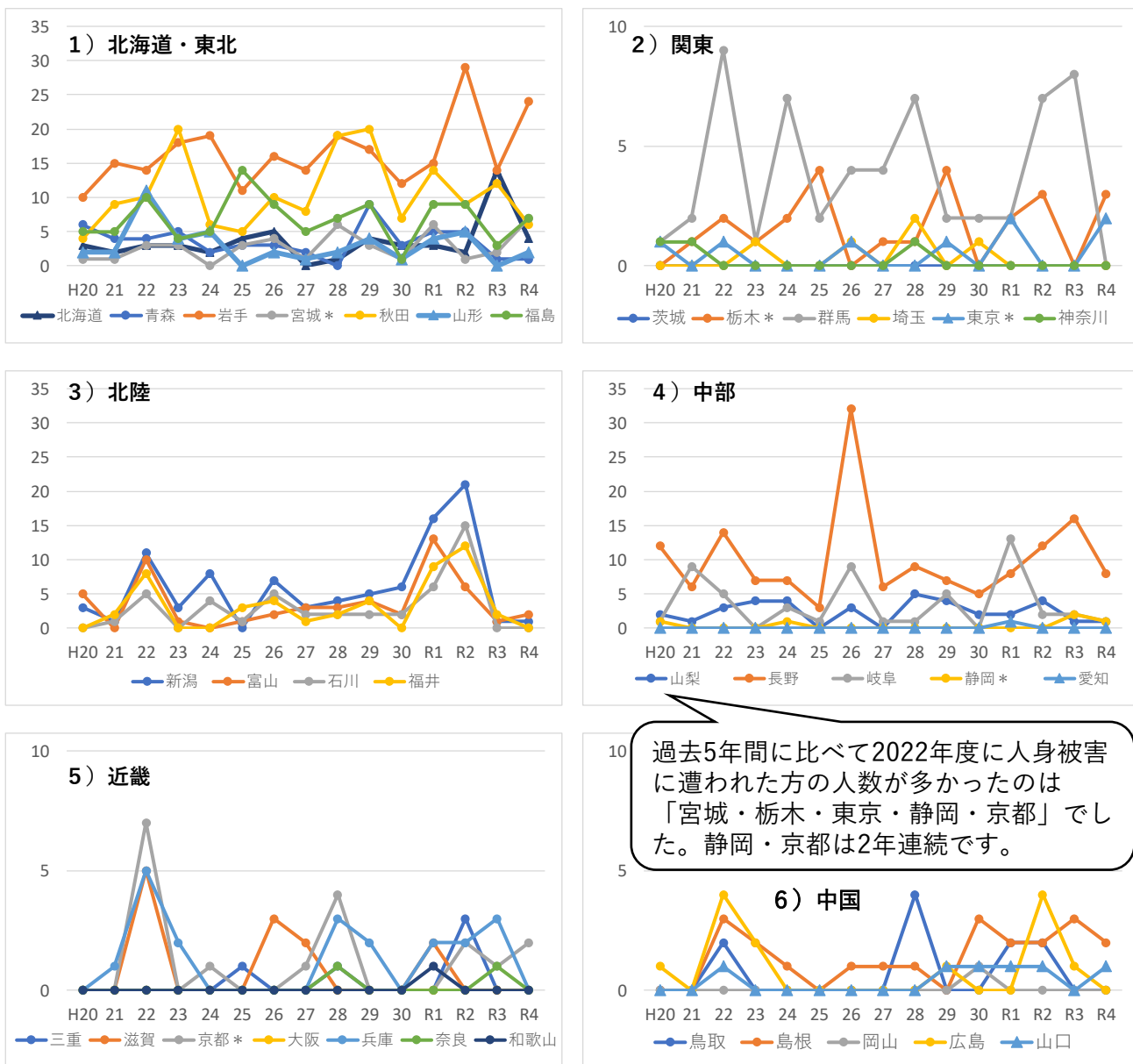


図3 平成20/2008～令和4/2022年度のクマ類による人身被害（人数）

・ 環境省webサイト（2023年5月16日付）より。

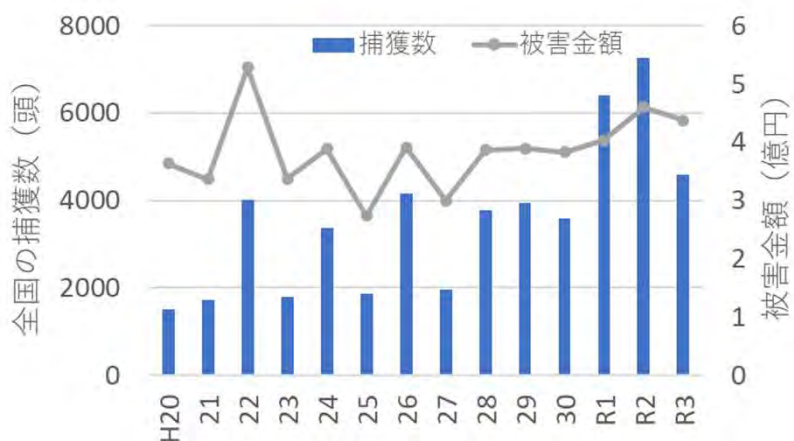


図4 平成20/2008～令和3/2021年度のクマ類による農作物被害額と捕獲数

・ 捕獲数は図1と同じデータ、農作物被害額は農林水産省発表のデータ（下部QRコード）を使用した。いずれもヒグマとツキノワグマの合計値。



各地区の状況 P 8～18 各地区の代表地区委員からR4/2022年度の状況についてご報告いただきました。ご協力いただいた地区委員、関係機関の皆様、大変有難うございます。

北海道 P 8	東北 P 9	関東 P11
北陸 P12	中部 P14	近畿 P15
中国 P17	四国 P18	九州からの報告事項はありませんでした

①出沒の傾向、**②人身事故**の発生状況、**③捕獲数**の傾向、**④農作物被害**の発生状況
⑤堅果類の結実状況、**⑥出沒対策**として取り組んでいることや良い事例等、
⑦その他特筆すべき状況、JBNとして取り組むべきと考えることを
 まとめていただきました。一部地区では市街地での出沒・事故の概況を「目立ってあった・
 ある程度あった・特に目立っていない・情報ない/不明」から選択していただきました。

北海道地区

釣賀 一二三（北海道立総合研究機構）、早稻田 宏一（NPO法人EnVision環境保全事務所）、
 山本 牧（NPO法人もりねっと北海道）、伊藤 哲治（酪農学園大学）、
 葛西 真輔（合同会社ワイルドライフプロ）

① 出沒 ▶札幌市における出沒情報は162件と例年に比べてやや多めであった。2021年6月の東区市街地への出沒事例、2022年3月の西区三角山での事故発生（後述）などを受けて、特にヒグマかどうか断定できない「ヒグマらしき動物」の情報も多く発生した。▶一方、旭川市（上川北部地域）、占冠村及び知床半島地域（羅臼町・斜里町・標津町）においては、例年と大きな変化はみられなかったものの、市街地や市街地周辺における出沒が多く見られた。出沒する個体の傾向としては、春先から繁殖期（6-7月）にかけて若い単独個体や親子を含むメス成獣の活動が目立つ状況であった。

市街地での出沒は？ 全道的には各地で市街地への出沒に関する報告が目立ってあった状況。市街地での人身事故はなかった。▶札幌市：目立ってあった。散発的ではあったものの、シーズンを通して市街地への出沒が発生した。▶旭川市（上川北部）：ある程度あった。郊外の農業施設で人に追われた若いクマが、墓地や宅地、国道を横切り石狩川の河川敷に入ったが、人家密集地への侵入はなかった。▶占冠村：なかった。▶知床半島：目立ってあった。

② 人身事故 ▶2021年度の事例となるが、2022年3月31日に札幌市の市街地に隣接する西区三角山において、市の委託を受けて冬眠穴を調査

していた調査員2名がヒグマに襲われて負傷する案件が発生した。冬眠していたのは0歳2頭連れのメスで、この地域における繁殖個体の冬眠が確認されたのは初めてである。▶7月5日にはオホーツク管内北部の滝上町で、ハンターがヒグマの有害駆除中に手負いになった個体を追跡して襲われた事例が発生した。また、7月15日には渡島管内の松前町で、市街地に隣接した農地（家庭菜園）で農作業をしていた女性が襲われた事例が発生した。後者は、昨年同様の事故（農作業中）が発生した地点から9kmほどの場所で発生しており同一個体によることも疑われたが、現地調査で採取した体毛の遺伝子分析の結果、別個体によるものであることが明らかになっている。

③ 捕獲 ▶北海道では2017年度以降800頭を超えるヒグマの捕獲が続いており、昨年度（2021年度）は過去最多の1,056頭が捕獲された。各地域からは、捕獲数が例年並み～やや増加であることが報告されており、2022年度についても高い水準の捕獲が続いていると考えられる。▶捕獲数の増加には後述のデントコーン作付けの増加も影響していると考えられ、占冠村では、村が実施する許可捕獲（10頭）のすべてがデントコーン被害防止目的であった。

④ 農作物等の被害 札幌市では南区の果樹園で被害が発生したが、市の担当部局による電

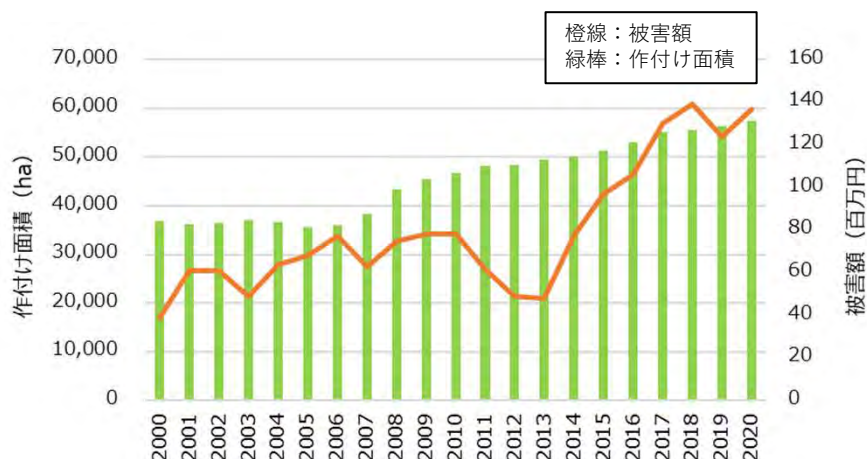


図5 北海道におけるデントコーン作付面積とヒグマによる被害額の推移 (2000-2020)

北海道農政事務所Webサイト
(URL:<https://www.maff.go.jp/hokkaido/toukei/kikaku/database/tikusan/tikusan.html#esa>; 2023年4月19日確認) 及び北海道ヒグマ管理計画 (第2期) (2022) 資料編より作成

気柵の設置によって収束した。占冠村では、2022年度から一部のデントコーン圃場周囲に金網のシカ柵を設置した結果、シカによる食害の抑制に効果が見られたが、圃場に出入りするヒグマによってシカ柵の破壊を受けた。このことは、従来よりも明確にヒグマの侵入位置や頻度を把握する手掛かりともなっている。道南の一部地域などで牧草地への再転換事例も見られるが、全道的にデントコーンの作付けは増加しており、それに伴ってヒグマによる被害も増加傾向にある (図5)。

⑤ 堅果の結実状況 道による調査 (北海道森林管理局、大学演習林、市町村、自然環境保全団体、道総研、道 (総合) 振興局職員等が実施) では、渡島半島のブナ、全道のミズナラとも不作である一方、漿果類 (ヤマブドウ、サルナシ) は並作。各地区からのミズナラに関する報告では、占冠村を除いて並作であり、道の調査における調査地点の充実が継続課題である。

⑥ 出沒対策 ▶札幌市：10月に南区の市街地に隣接した豊平川河川敷に若いヒグマが頻繁に出沒した際、市役所を中心に警察とハンターが連携協力して対応にあたり、排除すべきという判断の下、銃器で捕獲した。現場ではシカの死体が確認されたため、撤去した。▶旭川市：河畔林を利用したヒグマの市街地侵入を防止するため、河川敷を横断する電気柵を設置したが、中央部をくぐり抜けられた。併設した遠隔式カメラで侵入を察知し、最終的には河川経由の市街地侵入を防ぐことができた。柵の突破は防草シートによる絶縁が原因と考えられた。▶占冠村：広報や催事、学校教育を通じた普及活動を続けている。今後、ヒグマと人との距離がより近くなり、危険性が増して

いくことが懸念されるが、当面は人里周辺での予防的捕獲や個体数抑制のための捕獲は実施せず、地道な調査と個別対応を続ける方針である。▶知床半島：DNA分析による個体識別が進展し、問題を起こしたヒグマを識別し、その後に捕獲されたかどうかの判定が行えるようになった。そのほか電気柵の普及、植生の刈り払いや問題個体の捕獲等、市街地や農地への出沒に対して様々な対策が行われているが、あつれきは減少していない。

⑥ その他 ▶札幌市：より具体的なゾーニング管理の考え方を盛り込んだ「さっぽろヒグマ基本計画2023」への改定作業が進められた。▶知床半島：特に留意すべき問題個体が少なくとも2個体存在し、車に接触を繰り返す、ビニールハウス内に侵入して物品を荒らす等の問題行動を繰り返しているが、捕獲に至ってはいない。



鶴野-小野寺 レイナ (慶應義塾大学先端生命科学研究所所員兼鶴岡市鳥獣被害対策推進員)、近藤 麻実 (秋田県生活環境部自然保護課)、宇野 壮春 (東北野生動物保護管理センター)、山内 貴義 (岩手大学)

全体的な傾向として、初夏や春先の出沒は見られたが、秋の出沒は目立っておらず、年間を通じた出沒傾向や捕獲数は多くはなかった。ただし、突発的に市街地や住宅密集地に出沒する事例が見られた。全国の年間の人身事故の半数以上は東北で発生しているが、東北では8月以降の人身事故は非常に少ないことが2022年の特徴である。春先の人身事故は東北の山菜採り文化によるところが大きい。

① **出沒** ▶青森：2021年度(438件)よりも大幅に少ない(293件)。秋の山が豊作だったことを受けて、コグマが産まれ、個体数が増えたと仮定して2023年度初めに早々に「クマ出沒注意報」を発令。▶岩手：出沒傾向は例年並み(549件)だが、盛岡駅周辺を含む市街地での出沒はあった。▶秋田：初夏の出沒はあったが8月より目撃が急激に減少、直近5年間では2番目に出沒が少なかった。▶宮城：直近5年のうち最も出沒件数が少ない(549件)。▶山形：春先の80cm程度の幼獣(親離れ直後、ないし3歳未満)の出沒が多かった。秋の出沒は少ない。▶福島：例年並み(385件)だが、市街地出沒事例あり。

市街地出沒 ▶岩手：8月に盛岡駅から近い中心地で日中にクマが出沒。川沿いからの盛岡市内への出沒があり、直ぐに川に戻った可能性大。その後の通報も複数あったが、警察の調べによると信憑性は低く悪戯を含めた誤情報と思われる。▶宮城：9月6日に陸前落合駅の街路樹にクマが登り、夜間の麻酔銃捕獲を行った。捕獲個体はメスであった。▶福島：4月29日会津若松市の鶴ヶ城公園での出沒があり、その後捕獲された。

② **人身事故** ▶青森：5月16日登山中に1件。▶岩手：23件24名と非常に多かった。春先は山菜取りの事故が多いが、初夏の農作業や自宅付近でも事故が発生している。以降は里での事故が続いた。岩手県webサイトに情報あり。▶秋田：5～6月に6件発生。内訳は山菜採り中2件、他4件は散歩や農作業など、日常生活での事故。▶宮城：4月17日に里(田周辺)で1件。▶山形：5月の山菜採りでの人身事故2件。▶福島：7件、うち死亡事故1件。7月の登山中の事故1件を除いて、畑作業(7月に1件)や自宅周辺での事故(8月に4件)。

③ **捕獲** 環境省の統計(図1)を見ると、H28年より東北での捕獲数の増加が懸念事項である。▶青森：例年並み。▶岩手：特に多いという訳ではない。放獣事例12件。▶秋田：例年より少ない。初夏にピークがあり、9月以降は捕獲は少ない。▶宮城：ここ数年よりも少ないが、錯誤捕獲による捕獲が多い。▶山形：例年並み。▶福島：例年並み。放獣事例12件。

④ **農作物等の被害** 各県からは現時点で集計中との回答。大量出沒年の2020年では果樹の枝折れなどの大きな被害が報告されたが、2022年は現場からはあまり聞こえてこない。青森では例年リンゴ園に出沒しているとの情報があり、果樹やコーン畑など、電気柵の早期普及が期待される。

⑤ **堅果の結実状況** ▶青森：ブナは並作だが他の堅果類不作。▶岩手：ブナは並作。他の堅果類は比較的結実。▶秋田：県内5地点中、ブナは4地点で豊作、1地点で凶作、ミズナラは豊作と並作がそれぞれ1地点、残り3地点はナラ枯れ。▶宮城：ブナは並作。他の堅果類も比較的結実。▶山形：調査中とのことだが、現場の感触では並～豊作と思われる。▶福島：ブナは豊作、他の堅果類並作。

⑥ **良い出沒対策** ▶秋田：電気柵や緩衝帯整備事業、誘引木伐採事業などは継続中だが、出沒そのものを抑える特効薬はない。集落にクマが出沒した場合を想定した対応訓練を2020年から継続中。▶岩手：県で市街地出沒に関する机上訓練を2回行った。来年度は環境省の事業とも併せて実地での訓練予定。▶山形：現場での誘因物の特定と「クマの生態上、移動は止められないが、滞在する原因は人間側で排除できる」「誘因物を除去することでクマの滞在時間を減らし、出会う確率を下げるのが対策」との普及活動。▶福島：県では熊鈴の貸し出しを行っている。

⑦ **その他** 2021年度末がツキノワグマ管理計画の改定年だった県が多い。2020年度的大量出沒を経験した翌年であったためか、東北地区内のすべての県がクマの管理を強化する方向へとシフトした。▶秋田：集落内にツキノワグマが出沒した場合を想定した対応訓練を実施している。▶山形：イノシシの増加に伴い錯誤捕獲が増えてきて

各県庁のツキノワグマに関するページ





丸山 哲也（JBN会員）

以下の関東地区委員、JBN会員から情報提供をいただいた。茨城県：後藤 優介（茨城県自然博物館）、栃木県：丸山 哲也（JBN会員）、群馬県：姉崎 智子（群馬県立自然史博物館）、埼玉県：石田 健、東京都：山崎 晃司（東京農業大学）、神奈川県：長縄 今日子（丹沢ツキノワグマ研究会）、羽太 博樹（丹沢ツキノワグマ研究会）

① 出沒 ▶茨城：確実な目撃、痕跡情報なし。
▶栃木：目撃情報は88件で、平均的な値であった。
▶群馬：市街地での出沒がある程度あった。▶埼玉：県HPでは出沒件数76件となっているが、今後追加となるかもしれない。2021年度よりは出沒報道等が少ない印象だったが、2006年（特別だった）、2014年について3番目に多い数値となる。スマホの普及で報告される率が上がっているのかもしれない。市町別に公表されている出沒件数は、秩父市31件、小鹿野町8件、皆野町5件、飯能市6件の合計50件であり、県の発表より少ないが、県の情報には秩父環境管理事務所が独自に把握した情報が含まれているようである。近年の特徴として、市街地近郊や低地での情報が多い。かつてからあった奥秩父（荒川、大滝）での出沒情報が減っており、奥地では人の目の減少や、登山者による目撃は報告されていない場合があると思われる。今後、数多く設置されているセンサーカメラ情報を広く収集、集約するような作業が必要だと提案している。▶東京：人里への出沒は減少していない。出沒情報は東京都多摩環境事務所、奥多摩町役場などが収集して記録している。▶神奈川：初夏から晩秋にかけていくつかの地域で出沒が散発し、養蜂場や養豚場など誘引の強い特定の場所への執着が見られた。※群馬以外では市街地出沒は特に目立っていない。

② 人身事故 ▶栃木：3件発生。2件は登山中で、1件は郊外の住宅地で散歩中の事故。▶茨城・群馬・埼玉・東京・神奈川：なし。

③ 捕獲 ▶茨城：なし。▶栃木：有害捕獲は37頭で、平年並み。このなかには錯誤捕獲も含む。▶群馬：許可捕獲等（2023.3月末現在）は205頭。▶東京：奥多摩町と青梅市で計7頭の有害捕獲が行われた。この中にはくり罠への錯誤捕獲個体も含まれている。▶神奈川：狩猟は自粛されており、有害捕獲も行われていない。人里に執着した個体を奥山

に学習放獣するための捕獲が1件あったほか、錯誤捕獲が4件発生し、このうち2件は奥山に放獣、2件は安全上等の理由から捕殺された。

④ 農作物等の被害 ▶茨城：なし。▶栃木・群馬：2022年度分は未公表。▶埼玉：被害はあると思うが、目立ってはいない。▶東京：養蜂被害が報告されている。造林木へのクマ剥ぎ被害は広範囲に発生している。▶神奈川：人里にクマが出沒した際、柿、栗、養蜂、家畜飼料等に被害が発生した。

⑤ 堅果の結実状況 ▶茨城：未観測。
▶栃木：県北地域のミズナラ、コナラの結実は改善したが、高原地域、県南地域のコナラの結実は悪化。特に県南地域はミズナラ、コナラともに不作。▶群馬：全体としては不作。樹種別ではブナ、ミズナラ、コナラが不作、クリは並作、ミズキは大凶作。▶埼玉：石田氏の独自調査（奥秩父、大滝）では、豊作の少なめという印象。クマ棚は少なかった。コナラは不作でイヌブナは凶作。ブナはわずかに成っている個体もみたが、地上に殻斗はなく、不作。糞は多くはみかけず、11月末～12月初めの調査で固くなった古い糞ばかりだったので、早く食べて、早く冬越しに入った可能性がある。2023年2月に秩父市で出沒情報があり、冬眠開けも早かった可能性がある（不確定）。▶東京：定量的な計測はないが、ミズナラなどの結実は並作以上であった。▶神奈川：ブナは全体的には豊作と見られたが、一部結実がほとんど見られない個体もあった。ミズナラの結実は全体的に低調だったが、もともと現存量が少なく豊凶判断には留意が必要。また、コナラの結実も一部地域を除いて全体的に低調。

⑥ 良い出沒対策 ▶群馬：2021年度に改訂された群馬県ツキノワグマ適正管理計画において、河川整備、緩衝帯の設置、藪の刈り払い、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ対策として集中的な樹幹巻きを実施といった点が記載された。▶東京：奥多摩町等では電気柵の町民への設置指導を行っているほか、町民向けの獣害対策講座を2回にわたって実施した。▶神奈川：かながわ鳥獣被害対策支援センターの技術支援のもとで、自動撮影カメラによる人里への出沒監視、地域ぐるみによる藪の刈り払いや放置果樹の除去、柿畑や養蜂場等へ

の侵入を防ぐ電気柵の設置等が行われた。

⑦ **その他** ▶群馬：環境省のシカ、イノシシ捕獲強化推進にともない、くくりわなによるクマ錯誤捕獲が多く発生しているのが現状。これまでの、餌資源が不足しているから人里近くに出没し、捕獲されるのではなく、山地内で捕獲されている。

▶東京：都の事業として、奥多摩町周辺で3頭のツキノワグマにGPS首輪を装着して行動追跡調査が実施された。▶神奈川：2022年度に県のニホンジカとイノシシの管理計画が改定されたが、県が行ったパブコメで、わな捕獲におけるクマ等の錯誤捕獲防止について意見が寄せられ、計画に反映されたとのこと。



白石 俊明（富山県立山カルデラ砂防博物館）

以下の北陸地区委員、JBN会員の方に、情報収集にご協力をいただいた。新潟県：清水 あゆみさん（(株)ういるこ）、石川県：有本 勲さん（山立会）

① **出沒** 出沒件数は昨年度と同水準で少なかった（過去10年平均を下回る）。しかし、4県とも秋に限らず「市街地にある程度出沒」する事象が、北陸では「普通」となっている点は看過できない。いわゆる大量出沒は発生しなかったが、後述するように山林から離れた人家で人身事故が発生している。▶新潟：丘陵や河川沿いの平地で侵入事例が5～6月に頻発。▶富山：丘陵沿いの出沒が主だが、6月等は平地侵入もあり。▶石川：海沿いの平地や丘陵末端での出沒が生じた。一例を挙げると、ショッピングモールにクマが侵入し全国

ニュース（2021年10月）となったJR加賀温泉駅近くで10月に目撃あり。▶福井：5月に丘陵末端での出沒が多く、平地への侵入あり。

② **人身事故** 新潟1件、富山2件、石川・福井0件であった（過去10年平均は4県合計で19.3人）。▶新潟：6月11日に登山者（50代男性）が正午頃に襲われ左頬を負傷し重症。▶富山：6、10月にいずれも人家・田畑周辺で発生した。▶6月20日午前4:55、70代男性が自宅周辺を清掃中に、クマと遭遇し両肘を引っ搔かれ軽傷。丘陵から2.5km離れた田園地帯。4時間後に事故現場から約1km離れた

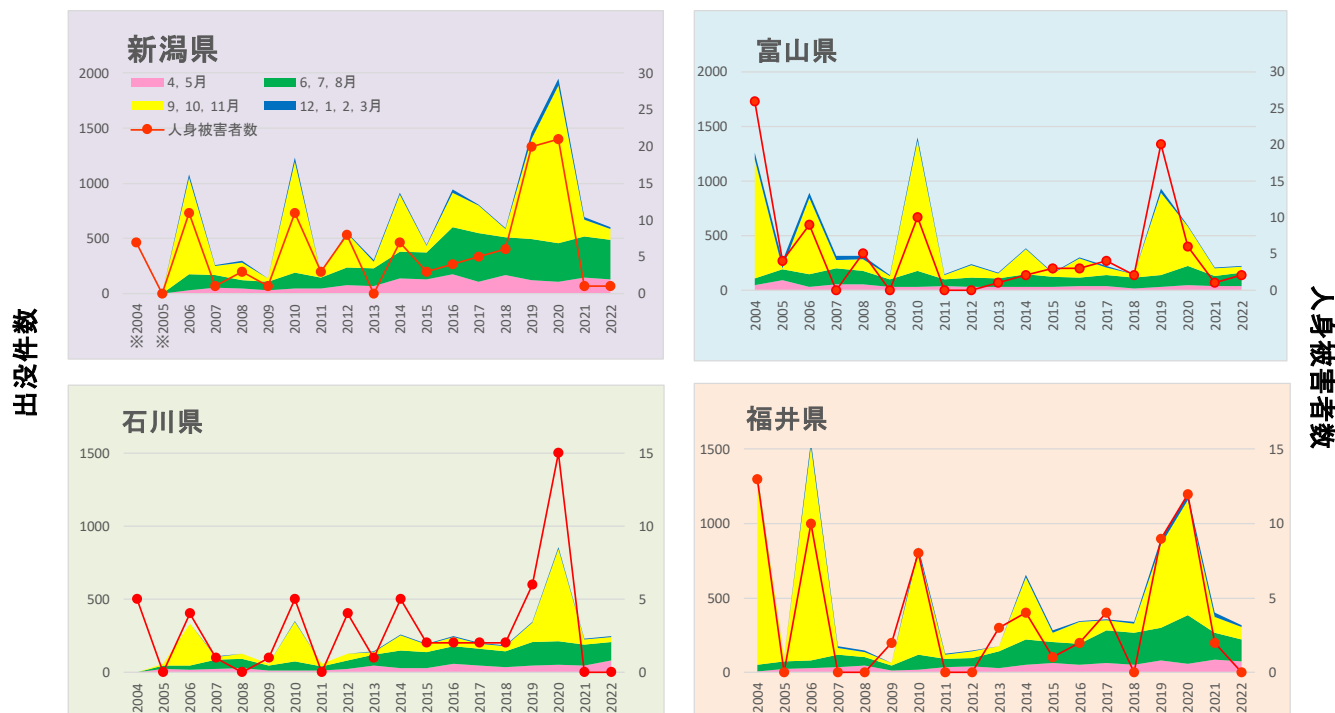


図6 北陸4県の出沒件数（季節別）と年間の人身被害者数

- ・ 石川県の出沒件数は目撃件数のみで痕跡情報を含まない。「※印」は出沒件数データがない年。

場所で捕獲。▶10月20日午前2:20、30代男性が新聞配達中にクマと遭遇し右脚を噛まれた軽傷。丘陵から約0.5km離れた水田地帯。前日深夜にも近隣の民家で目撃あり。5時間後に隣の民家敷地内で捕獲・体長1.3m成獣。

③ **捕獲** 4県とも許可捕獲頭数は平年（過去10年平均）よりやや少なかった（表1）。放獣数の多い福井県（過去10年平均は14.2頭）では捕獲数が減る傾向を心配する声がある。

④ **農作物等の被害** 今回、情報収集を行っていない。

⑤ **堅果の結実状況** ▶石川：ブナが不作だがミズナラは大豊作、ほか3県も概ね結実は良好で、不作～並作が主だった。▶富山：県東部の一部でマイマイガが大量発生し、ブナの葉が全消失し地面に未熟果が大量に落下する事象が起きた。

⑥ **出沒対策** 富山、石川では自動撮影カメラとAI（人工知能）による獣種判別を活用したシステムで、クマ出沒をリアルタイムで監視する取

組みが始まっている（カメラ台数はまだ少ないものの、富山では2市・14台、石川では県と市あわせ4自治体で75台が稼働。2023年度には富山・福井など6自治体で約30台を導入予定）。

⑦ **その他** 地球環境基金の助成を受け、2020年度からJBNで実施したアーバンベアプロジェクトの一環として、2022年10月15日に北陸最大級のショッピングセンターで買い物客を対象にした「市街地に出るクマについて知るレクチャー」を実施した。北陸版のクマに関する普及啓発教材を集めたトランクキットや大型の出沒地点マップなどを活用しながらレクチャーを行った。レクチャー実施後にアンケートをとると95.5%の人がクマ出沒が自分にも関係が「ある」と回答するなど、今後の継続した普及啓発につながる、手ごたえのあるイベントとなった。詳細は、アーバンベアプログラムの報告書も参照いただきたい。



QRコード
地球環境基金プロジェクト
「街に出るクマ～アーバンベアとどう付き合うか～」報告書

表1 北陸4県の堅果結実・出沒・事故の概況（2022年）

県		新潟	富山	石川 ※2	福井
堅果結実 ※1	ブナ	○	△	×	△
	(前年・2021年)	×～△	○	◎◎	○
	(前々年・2020年)	×～△	×	××	×
	ミズナラ	○	△	◎◎	○
	(前年・2021年)	×～△	△	◎	△
	(前々年・2020年)	△～○	△	○	△
出沒 ※2	コナラ	○	○	○	○
	(前年・2021年)	△～○	△	○	△
	(前々年・2020年)	×～△	×～△	×	△
出沒 ※2	1～12月の件数	596 件	221件	244 件	314件
	(2012～2021平均)	(867件)	(333件)	(279件)	(478件)
	9～11月の件数・%	100件・17%	59件・27%	32件・13%	85件・27%
事故	(2012～2021平均)	(408件・38%)	(189件・45%)	(115件・30%)	(227件・37%)
	件数・人数	1件・1名	2件・2名	0件・0名	0件・0名
捕獲 ※3	(2012～2021平均)	(6.6件・7.5名)	(3.3件・4.2名)	(3.4件・3.9名)	(3.6件・3.7名)
	頭数(4月～翌3月)	139頭	60頭	41頭	80頭
	(2012～2021平均)	(254頭)	(78頭)	(61頭)	(105頭)

※1 堅果結実 凡例：◎豊作、○並作、△不作、×凶作、石川県は「◎大豊作、××大凶作」の指標を用いる。

※2 石川県は目撃のみで痕跡等を含まない。

※3 年度計の許可捕獲数

中部 地区

玉谷 宏夫（ピッキオ）

中部地区委員の、朝倉 美波・岸元 良輔（信州ツキノワグマ研究会）、橋本 操（岐阜大学）、竹内 翔（静岡県）、玉谷（ピッキオ）が各県の担当部署への聞き取りなどによって情報を収集した。

一部の地域で市街地への出没や人身事故があり、錯誤捕獲の件数は高止まりしているものの、出没数や捕獲数を見ると、**ここ数年の中では平穏な一年だったと言える。**

① 出没 ▶岐阜：市街地での出没は特に目立っていない。例年と同じく、飛騨地域、東濃地域での出没は一定数あったが、著しい増加や新たな場所への出没等はみられなかった。ただし、飛騨地域では6月に目撃件数がピークを迎えた後、8月に再度増加した点が2021年とは異なっていた。出没した場所別にみると、最も目撃が多かったのは道路で、次いで住宅地、山林・林道・林地、農地だった。これは例年と同様の傾向であった。
▶静岡：市街地での出没は特に目立っていない。静岡県のツキノワグマは「富士地域個体群」と「南アルプス地域個体群」に二分される。2021年は5月に富士地域で目撃情報が多かったのに対して、2022年は年間を通じて両地域で少なかった。
▶愛知：市街地での出没は特に目立っていない。
▶長野：市街地での出没は特に目立っていない。里地での目撃件数は大量出没年（2006、2010、2014年）を除いた年の平均値と同等であり、8月にピークを迎えるという傾向も同じだった。ただし、地域によっては例外もあり、上田市の住宅地では10月にクマの目撃が相次いだ。この一連の目撃情報に関与していたのは特定のメスグマであり、カキなどの果実に誘引されたものだった。

② 人身事故 いずれの県も市街地での事故は特に目立っていない。▶岐阜：8月に1件の人身事故が発生したが、市街地での事故ではなかった。
▶静岡：静岡市中部地区の山奥でシカのわなにかかった子グマに近づいたところ、親グマにひっかかれて負傷（1件）。▶愛知：なし。▶長野：4月から3月までの間に8件（8人）の事故が発生した。前年度の16件（16人）より減少した。2件は里地での事故であり、隣家に回覧板を持参した時（南箕輪村）および山際の道をウォーキングしていた時（御代田町）にクマと鉢合わせしたものだ。大部分（7件）の事故は8～19時の間に発生した。

③ 捕獲 ▶岐阜：58頭が捕獲され、2021年度の30頭から増加した。各地域の捕獲頭数をみると、目撃が最も多い飛騨地域で43頭、次いで東濃地域9頭、岐阜地域4頭、中濃地域2頭だった。捕獲頭数は目撃件数の推移と連動するように6月に増加し、その後減少してから8月に再度増加した。最も捕獲頭数が多かったのは8月だった。▶静岡：南アルプス地域では林業被害防止のために31頭が許可捕獲され、富士地域ではシカ用のくくりわなで4頭が錯誤捕獲された。錯誤捕獲されたクマは麻酔をかけて放獣した。▶愛知：なし。▶長野：捕殺数は個体数調整によるものが145頭、緊急捕獲が30頭の計175頭（速報値）で、一昨年度の316頭、昨年度の266頭と比較して91頭減少した。36頭を学習放獣した。錯誤捕獲（放獣）は295件発生し、一昨年度の362頭、昨年度の306頭に続いて高止まりしている。2021年度には狩猟で34頭が捕獲された。長野県では狩猟が始まる11月15日を個体数管理の起点にしており、個体数調整による狩猟への影響は基本的でない。

④ 農作物等の被害 ▶岐阜：飛騨地域で果樹被害が報告されたものの、2021年度まで被害状況の資料提供がなかったため、増減の傾向はわからない。▶静岡：ミツバチの巣箱への被害が県中西部地域で1件発生した。▶愛知：養蜂箱（個人のものか養蜂家のものかは不明）が被害を受けた。▶長野：農業被害は減少傾向にある一方で、クマ剥ぎによる林業被害は2015年以降、やや増加傾向にある。2021年度のクマによる農林業被害額は、全鳥獣被害額の19.7%に相当する約1億4400万円だった。

⑤ 堅果の結実状況 ▶岐阜：豊凶予測調査を実施して、県全体ではブナが凶作（凶作～並作までばらつきあり）、ミズナラが凶作（凶作～並作までばらつきあり）、コナラが凶作（大凶作～並作までばらつきあり）と評価した。とりわけ東濃地域は東部でコナラが大凶作、ミズナラが凶作、飛騨地域は北部でコナラ・ミズナラが凶作だった。しかし、県全体で堅果類が凶作であった

にも関わらず、晩夏から秋のクマの目撃件数や被害件数は多くなかった。ブナ、ミズナラ、コナラ以外のものを食べていた可能性が考えられる。▶静岡：ブナ科樹木の豊凶調査は行われていない。県内全域でコナラを中心とするナラ枯れ被害が広がっており、クマの行動への影響が心配される。▶愛知：県内平均としては並作。ただしミズナラは一部地域で大豊作～凶作で、ばらつきがあった。▶長野：ブナ：大凶作～豊作、ミズナラ・コナラ：大凶作～大豊作、クリ・クヌギ等：大凶作～大豊作で、ばらつきが大きいものの、県内全体では一定程度の結実量が見込まれた。北信ではブナの着果状況が良好であり、東信の上田地域ではクリ、クルミが大豊作となった。全県的なクマの大量出沒の可能性は低い、堅果類の少ない地域ではクマの行動範囲は広がる可能性があること、越冬中のクマの出産が一定程度見込まれることなどをホームページで発信した。

⑥ 出沒対策の事例 ▶静岡：集落周辺の放置果樹の回収。田畑や果樹園、養鱒場の周囲を電気柵で囲う。▶愛知：豊田市でセンサーカメラ等による調査を実施中。▶長野：○春期捕獲（許可捕獲）：銃器で捕獲するため追い払い効果が期待でき、里地でのわな捕獲と比べて被害を抑制する効果が期待できる。また、伝統的な猟法の存続や狩猟技術の維持にもつながる。このため、専門

家を含む保護管理協議等を経た計画に沿って捕獲の実施および評価ができる地域においては春期捕獲を認めている。○地域区分（ゾーニング）：伊那市、山形村、朝日村、小谷村で地域区分導入の検討を進めている。○現場対応：県がNPO等に設置を委託している「クマ対策員」が、市街地への出沒や人身事故発生時の現場検証、住民への普及啓発、錯誤捕獲対応などを実施している。○捕獲上限数：昨年度の5期計画から、推定個体数の増加に伴い捕獲上限数をこれまでの約2倍の337頭（大量出沒時は675頭）に引き上げた。今後、この上限数が現場でどのように運用されていくのか注視していく。

⑦ その他 ▶岐阜：クマの錯誤捕獲が起きないように、イノシシ用の箱わなについては上部に穴が開いたものを使用している。県の担当部署には、クマが餌付いてトラップハッピー状態になるのではないかと、危なくはないか、という問い合わせが届いている。他の地域では、錯誤捕獲に対してどのような対策をしているのか情報がほしい。また、今のところ市街地でのクマの出沒は目立っていないが、今後の出沒に対する備えが課題である。他の地域の体制を参考にしたい。▶静岡：同じ個体を何度もくりわなで錯誤捕獲するケースが増えている。クマの行動特性に着目した対策についても検討が必要になってくるのではないかと。

近畿地区

中川 恒祐（（株）野生動物保護管理事務所）
近畿地方の2022年度のクマの状況を、北部地域（兵庫県、京都府、滋賀県、大阪府）と南部地域（奈良県、和歌山県、三重県）に分けて報告する。



① 出沒 全体として市街地での出沒は、特に目立っていない。▶北部：出沒の少ない大阪府を除く各府県の月毎の出沒状況を、環境省発表の速報値をもとにグラフにまとめた（各府県12月まで、図7）。滋賀県では例年と比べて春の出沒が少なく、通年での出沒数も多くはなかった。京都府では例年と比べて春から夏の出沒が少なく、秋の出沒が増加した。兵庫県は春の出沒が過去2年間で同程度あったのに対して、秋の出沒が増加した。大阪府では7件の出沒があった。▶南部：環境省発表の速報値によると、3月末の時点で奈良県は70件、和歌山県は57件、三重県は19件の出沒が発生している。奈良県は2009年以来もっとも多い出沒となり、和

歌山県も昨年に続き出沒が多かった。三重県は例年よりやや出沒は少なかった。なお、近畿南部のクマ（紀伊半島地域個体群）は環境省の定める「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定されていることから、全体としては多くの出沒はないが、和歌山県、奈良県はやや増加の兆しがある（図2も参照）。

② 人身事故 市街地での事故は特に目立たなかった。▶北部：京都府で2件の人身事故が発生した。幸い死者は出ていない。京都府の事故はどちらも集落内の自宅近くで発生した。▶南部：2022年度の出沒なし。

③ **捕獲** ▶北部：兵庫県、京都府では2017年度からゾーニング管理が実施されており、集落周辺での有害捕獲が増加している。両府県の捕殺数は兵庫県で37頭、京都府で114頭となっており、兵庫県では過年度に比べて捕殺数は減少した。京都府では出没の多かった2019年度を除くと過年度と同程度の捕殺数になった。また、滋賀県では1頭、大阪府では捕殺はなかった。兵庫県と京都府で狩猟が解禁されている。滋賀県では例年通り狩猟は自粛となっている。▶南部：2022年度は捕殺は実施されなかった（環境省発表）。

④ **農作物等の被害** ▶北部：京都府、滋賀県では人工林への剥皮被害（クマハギ）が毎年一定程度発生している。クマハギへの対策として、テープ巻き防除が実施されている。兵庫県、京都府では例年同様に農作物被害としてカキ、ナシな

どの果樹への被害が多く発生した。▶南部：紀伊半島では一般的な農作物被害はほとんど発生せず、集落周辺や山中に置かれた蜜胴の被害がある。

⑤ **堅果の結実状況** ▶北部：兵庫県、京都府、滋賀県では豊凶調査が実施されている。兵庫県ではブナが大凶作、コナラ、ミズナラが並上で3種全体では並上であった。京都府ではコナラが並作、ミズナラ、ブナが凶作であった。滋賀県ではミズナラ、コナラが不作、ブナが凶作であった（表2）。

⑥ **出沒対策** ▶北部：クマを誘引する集落内の不要なカキやクリの木の伐採を行政として推奨している。また、集落周りの動物が隠れられる藪などを刈り払い、バッファゾーンを設置している。また、果樹等の被害防止のため、電気柵等の対策が行われている。兵庫県は轟音玉等によりクマの追払いを実施することもある。兵庫県では、民間企業に委託した鳥獣対策サポーター事業を実施しており、市町村からの委託により獣種に限らない総合対策（実態把握、点検、指導など）を行っている。

⑦ その他

近畿地区では2022年9月にアーバンベアプロジェクト

の一環として、「クマにかかわる普及啓発を実践する人材育成ワークショップ in 関西地区」を大阪市で開催した。ワークショップには9名の方が参加し、市民目線でクマの普及啓発をどのように行えばいいか活発な議論が行われた。近畿地方では1990年代から錯誤捕獲や出没に対する対応体制が構築されており、現在もよく機能している。

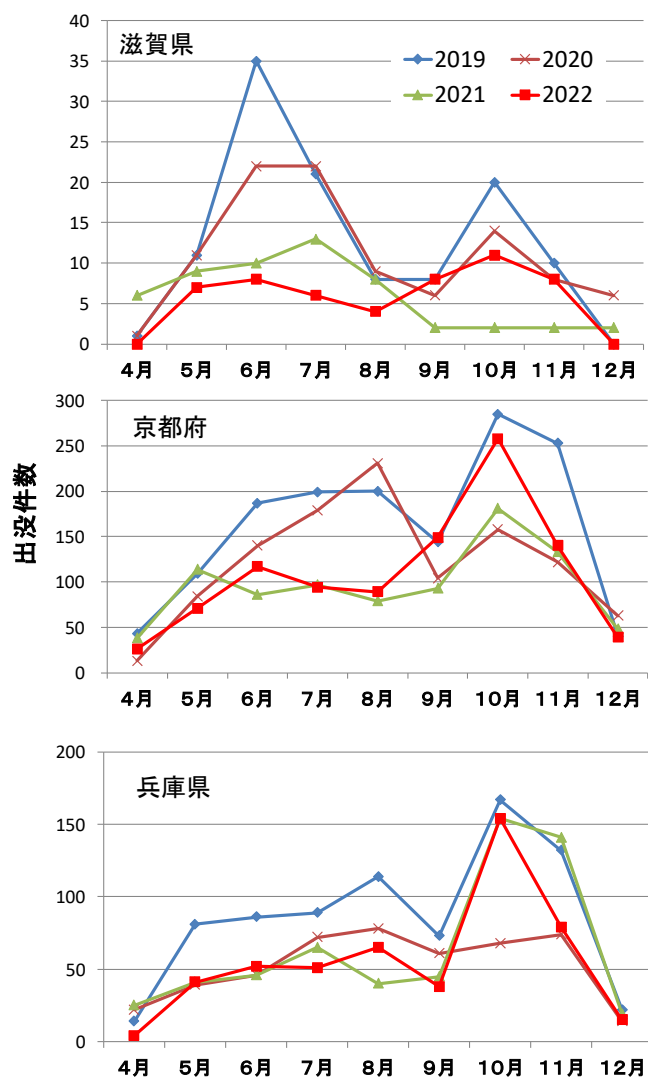


図7 近畿北部の月別出沒情報数

表2 近畿北部の堅果類の結実状況

		2017	2018	2019	2020	2021	2022
兵庫県	ミズナラ	豊作	並上	凶作	並下	凶作	並上
	コナラ	豊作	並下	並下	凶作	並下	並上
	ブナ	並上	凶作	大凶作	大凶作	豊作	大凶作
京都府	ミズナラ	並作	並作	凶作	並作	並作	凶作
	コナラ	並作	並作	凶作	凶作	並作	並作
	ブナ	並作	凶作	凶作	凶作	豊作	凶作
滋賀県	ミズナラ	並作	不作	凶作	並作	不作	不作
	コナラ	不作	不作	不作	不作	不作	不作
	ブナ	凶作	不作	凶作	凶作	不作	凶作



澤田 誠吾・石橋 悠樹（島根県）

① 出沒 市街地での出沒は特に目立っていない。市街地での出沒はなかったが、中山間地域の集落内において、誘引物等がなくうろつく個体が島根県や山口県であった。また、島根県では、民家の納屋にクマが籠城した事例も発生した。

② 人身事故 市街地での事故は特に目立っていない。全体では、島根県2件、広島県0件、山口県1件、鳥取県0件、岡山県0件。▶島根での1事例の概要：2022/10/10 23:00頃、80歳代男性、夜間に家の外に設置されているトイレに向かったところ、背後からクマらしき動物に突き飛ばされた。左腰から脇腹にかけて4か所を引っ掻かれたが軽傷であった。市防災無線による注意喚起、周辺のパトロール、現場検証を実施。

③ 捕獲 2022年度の捕獲数は、島根県99頭、広島県は38頭、山口県は30頭、鳥取県41頭、岡山県24頭だった（図8）。また、島根県では、集落周辺で自然死個体と瀕死の個体が5頭発見された。これまで、大量出沒年に自然死個体が発見された事例はあったが、単年度で5頭も発見されたのは初めてだった。個体分析の結果や発見状況などから、「なぜ？5頭も発見されたのか」についてミーティングができればと考えている。

④ 農作物等の被害 島根県では養蜂蜜洞への被害、ビワ、カキへの被害が発生した。山口県では養蜂とリンゴの被害があったが、その他の県での被害はなかった。

⑤ 堅果の結実状況 ▶西中国地域（島根・山口・広島）での目視調査より。ブナ県東部豊作、県西部凶作、ミズナラ凶作、コナラ豊作、クリ並作、クマノミズキ豊作。▶鳥取：ブナ並作上、ミズナラ豊作、コナラ並作上、クリ並作下。▶岡山：ブナ並作、ミズナラ並作、コナラ並作。

⑥ 出沒対策 ▶島根県において有害鳥獣誘引果樹等除去事業を実施した。これまで人が管理、利用していた集落内の果樹園や庭先の樹が、高齢化や空き家の増加等により管理収穫されずに放置される事例が増加している。果樹の栽培種は、山の餌よりも甘さや栄養に優れ、クマが放置果樹の存在を認知すると繰り返し出沒、加害する要因となっている。被害を防ぐためには管理放棄された果樹の適正な管理が必要である。これまでも集落ぐるみでの誘引物対策の実施を推奨してきたが、経費がかかること、中山間地域等では人口減少や高齢化で実施体制づくりが進まないこと、誘引物対策の必要性や誘引物除去の効果について、関係者や住民の理解が不足していること等から取り組みが進んでいなかった。そこで、モデル地区を定めて、管理放棄された果樹等の伐採を実施し、クマ等の出沒抑制効果を実証すると共に成果を市町へフィードバックし、誘引果樹除去の取組拡大を図っている。

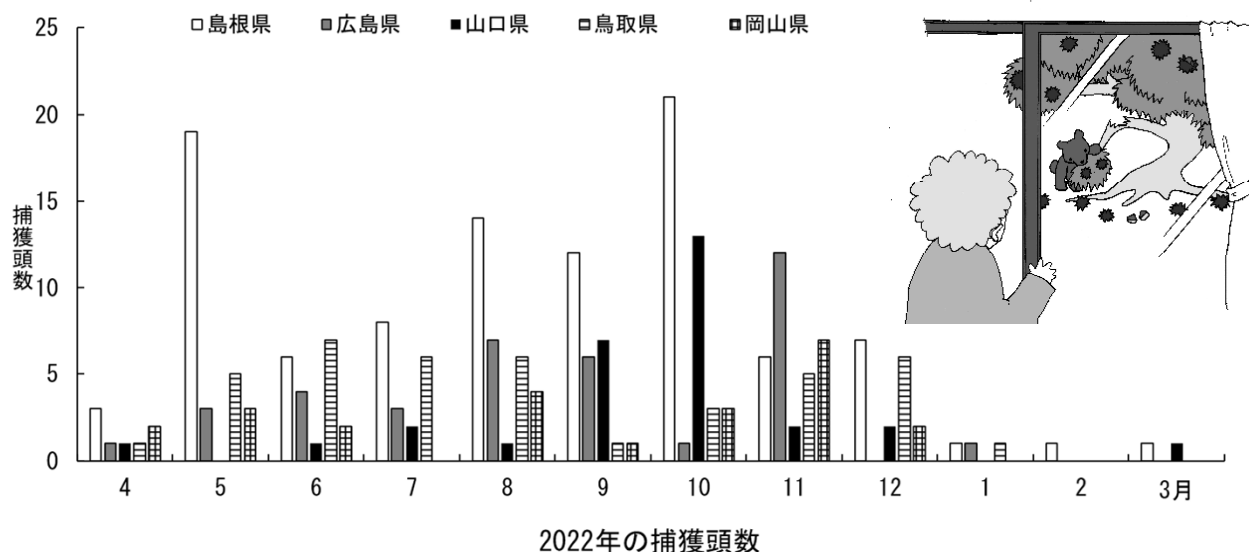


図8 中国地区の2022年度の月別捕獲数



山田 孝樹
(四国自然史科学研究センター)

① 出沒 山間部（クマの生息地域内、集落等は付近にない）の林道や町道において、同一個体と考えられるクマの目撃情報が6月から8月にかけて複数寄せられた。目撃状況は道路を車で走行中に、道路横の林内にいるクマを目撃する事例が多かった。人間に対して警戒心が薄く、目撃時にクマが逃げずに行動する様子が複数回報告された。9月以降は目撃情報が無くなった。徳島新聞のYouTubeチャンネルで目撃時の動画が公開されている（QRコード①）。

② 人身被害 ③ 捕獲 ④ 農作物等への被害

いずれも、特に情報なし。

⑤ 堅果の結実状況 ブナとミズナラの豊凶を目視調査により把握している。ブナは豊作、ミズナラについては並作～豊作であった。

⑥ 出沒対策 左記で報告した目撃情報については、徳島県が注意喚起のチラシを目撃地点や周辺の観光施設などに配布した。また後述の地球環境基金プロジェクトの一環で、養蜂被害防除活動として電気柵の設置を一部実施している。

⑦ その他

- JBNで2017年度から3年間実施した四国プロジェクト（地球環境基金）を継続する形で、四国自然史科学研究センターによって地球環境基金助成による「四国のツキノワグマ保護プロジェクト」（2022年度は3年間の3年目）を実施した。このプロジェクトでは引き続き、JBN及び日本自然保護協会と連携・協働して活動を実施している。詳細はプロジェクトのHPを参照（QRコード②）。
- 上記プロジェクトによって、四国のクマの生息地内にある徳島県那賀町木頭において「木頭くま祭り」を開催した。公開シンポジウムなどの当日の様子は四国自然史科学研究センターのYouTubeチャンネルで公開している（QRコード③）。



QRコード① 徳島新聞のYouTubeチャンネル

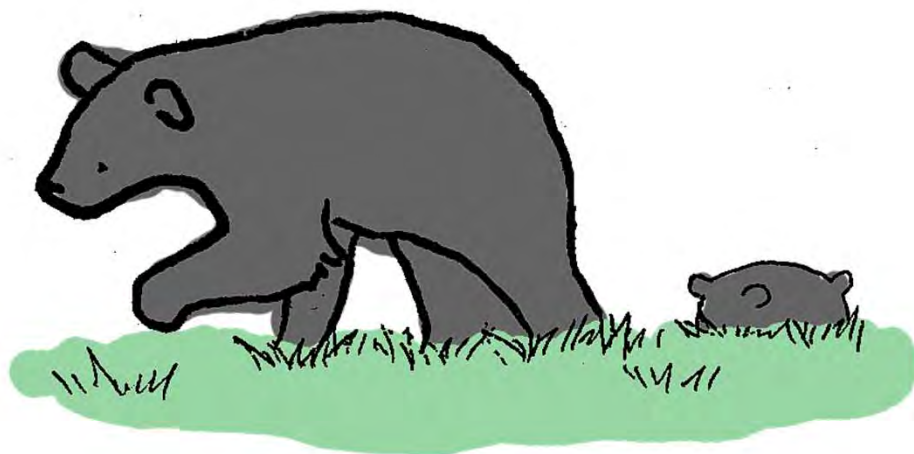


QRコード② Save the Island Bear「四国のツキノワグマ保護プロジェクト」HP



QRコード③ 保全と地域の暮らしの両立を目指して～木頭から始まるツキノワグマ保全のカタチ～

なお、九州地区からは「情報なし」とのことでした。



「第14回北海道の今後のヒグマ研究を考えるワークショップ」に参加して

清水 広太郎（北海道大学野生動物学教室 博士課程3年）

2023年3月9～10日に北海道大学にて行われた「第14回北海道の今後のヒグマ研究を考えるワークショップ」に出席しました。このワークショップは研究者や地方自治体関係者、学生などヒグマに関わる人々が集まり、それぞれの立場に基づく研究成果や保護・管理に関する課題、または個人的な体験談などを共有し、ヒグマに関する知識を深め、将来のヒグマの保全と管理を担う若手人材を育成することを目的としています。

今年は2日にわたって開催され、ヒグマづくりの2日間となりました。発表内容はカメラトラップ・GPSを利用した行動解析や分布構造に関する研究、糞分析や安定同位体比解析による食性調査、血液を利用した年齢推定法などの生理学的研究、さらには聞き取り調査による社会学的研究など多岐にわたりました。私もヒグマに寄生するマダニ種構成についての発表を行い、多くの人に興味を持ってもらうことができました。様々な切り口からヒグマに迫ることで、改めて奥深い動物であることが実感できました。

2日目に行われたテーマセッションでは「転換期を迎えたヒグマ管理にヒグマ研究はどう貢献できるか？」という趣旨のもと2つの演題と総合討論が行われました。自分の研究が社会にどのように貢献できるか、というのは学生を含む多くの研究者にとって非常に重要な課題です。しかし一方で、学会等では学術的な議論に終始し、意見交換の機会が少ないテーマでもあります。本ワークショップではヒグマ管理の第一線で活躍する方々の発表の後、総合討論にて多くの議論が行われました。研究と保全管理の現場をつなぐ意見交換が行えることは本会の大きな意義であり、私を含め多くの学生にとって素晴らしい経験になりました。

先述の通り、本ワークショップでは様々な分野の発表が行われ、また多くの参加者がオンラインで参加し、活発な議論が数多く行われました。これをお読みの皆さんも、是非次回のワークショップに参加し、一緒にヒグマ研究を盛り上げていきましょう。



◀ワークショップの最後に撮影した
集合写真



皆様のご意見を募集します！

新聞の投書欄をイメージしたコーナー、「Letters from」。皆様が日頃から抱くクマへの思いや共存に向けての考えなどを綴って、伝えてみませんか？ご投稿をお待ちしております!!

【応募内容】

字数：800～1,000字程度 画像：自身のお写真や投稿内容に関連するもの。

応募先：bj@japanbear.org

※次号以降の掲載を予定しております。詳細はMLをご確認ください。

開催報告

JBN関連のイベントや事業について報告をするこのコーナー。
今回は3月に盛岡で開催された、クマに関わる普及啓発を実践する
人材育成ワークショップについて、ご報告いただきました！

クマにかかわる普及啓発を実践する人材育成ワークショップ in 盛岡 開催報告

滝川 あかり（岩手大学ツキノワグマ研究会4年）

3月18日、岩手県盛岡市の地域交流センターマリオスにて普及啓発ワークショップを開催しました。4回目は盛岡での開催となり、私は運営の手伝いと参加をしましたので、その報告をさせていただきます。

今回の目標は『アーバンベア問題を踏まえたうえで、クマとの共存に向けて住民に「何を伝えたいか」を考え、トランクキットを用いて「どのように伝えるか」アイデアを出す』でした。参加者は22名で、県・市の行政職員や、盛岡市動物公園スタッフ、住民の方、大学生などが参加し、2班ごとにクマの生息地域または隣接地域の場合について、それぞれ課題に取り組みました。当日の内容は以下の通りです。

(1)クマとの共存のため、何を伝えるか？

何を地域住民に伝えていくのが良いか班内でまとめ、全体に発表しました。発表内容を生態・環境対策・出没情報などと項目ごとに示す班が多く見られました。「農村は市街地との関わりが少なく、小さなコミュニティでの情報共有が多い」や「市街地に出ても麻醉銃はすぐ使えない」といった現状の確認、「農家と行政の繋がり」や「地域のクマ出没マップ」などの必要なもの、「自分自身にできることって何だろう」という問題意識、「隣接地域でも出没はありえる」といった意見が出ました。



ワークショップの様子。



トランクキットを手に地域住民と意見交換ができました。

(2)トランクキットを使ってどのように伝えるか？

トランクキットを使って(1)をどう伝えるか考えました。以下、班ごとに出た案です。A班：実物に触れ、凄さを感じてもらい、自己防衛の方法や草刈りによる出没しにくい環境作りの重要性を大人中心に伝える。B班：盛岡市動物公園で実施し、クマの展示の前でクマ肉の試食(!)や匂いを嗅ぐことで、リアルさを感じてもらう。C班：子供向けとし、クマの足跡を探すゲームで足跡を覚えてもらい、子供の発見を通して親や先生との話題のきっかけにしてもらう。また糞の分析会を開催し、クマと自然との繋がりを学んでもらう。D班：ショッピングモールで開催し、楽しい生態の面から大人向けの深い現状や対策について伝えていく。

最後に全体を通して、時間が足りないほど議論が煮詰まり、私自身も実際にやってみたい！と思う案が多くありました。またクマに関心のある人が立場関係なく同じ間について考える、このワークショップの存在意義を強く感じました。住民の意見を引き出す場が増えていくと、多くの人がクマについて考えて支えたいと動き、アーバンベア問題の解決へと繋がっていくのではないかと思います。自分にできることから動いていきたいと思う良い機会となりました。ありがとうございました。

デントコーンを食べるヒグマ： どれくらい？ どのような個体がどこで？

北海道大学大学院環境科学院
(研究当時：北海道大学農学部 生態系管理学研究室)
崎山 智樹

はじめに

日本全国で問題になっている野生動物による農業被害。統計を見るとイノシシ、シカ、サルによる被害が目立ちますが、実はクマによる食害も生じています。クマの農地出没の場合は経済的な損失だけでなく、農家や地域住民の心理的な不安にも繋がっています。出没個体の捕獲は危険と隣り合わせであるため、クマとのあつれきは大きな問題です。今回紹介する研究は、北海道の渡島半島で捕獲されたヒグマによる農作物の利用について調べたものです(図1)。

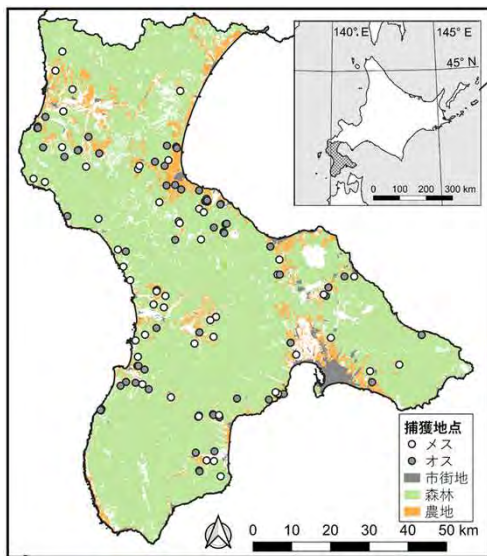


図1. 調査地域の地図。図中の点はヒグマの捕獲地点を、背景色は土地利用を示しています。ヒグマが捕獲された場所の多くが農地周辺であることが分かります。

ヒグマの食性は過去にも胃内容物から明らかにされてきましたが、この方法では死亡直前に食べていたものしか分かりません。本研究ではヒグマの体組織の安定同位体比を分析することで、ほぼ一生分の食性を評価しました。また、これまでの研究から少し着眼点を変えて、農作物を多く食べ

ている個体、すなわち食害をよく起こしている個体がどのような特徴を持ち、どのような場所を利用しているかに迫りました。対象個体は2000~2012年の間に捕獲された123個体(メス61個体、オス62個体、すべて4歳以上)です。

コーンの利用割合は多い個体 で30~40%超

ヒグマによる農業被害の半分以上はデントコーン(飼料用トウモロコシ)畑で起きています。そこで、本研究では一個体が一生に利用する食物資源全体に占めるコーンの割合に着目しました。この分析のために用いたのがヒグマの骨です。骨は一生かけて作られていく体組織であるため、ヒグマがその間に何をどれくらい食べたかといった情報を保持しているのです。具体的には、骨の炭素、窒素安定同位体比というものを調べて、それを食物資源の同位体比と比較することで、食性を評価しています。

分析の結果、食性全体に占めるコーンの割合はメスで1.3~30.9%、オスで1.3~42.0%となりました(図2)。食害が起きている以上、自然由来の食物資源だけではなくコーンも食性に含まれるだろうと予想していましたが、コーンの利用割合が30~40%を越える個体がいたことは驚きでした。一生のうちには他の資源も大量に食べているので、ある年だけ大量にコーンを食べたとしても、その利用割合はそこまで高くないはずですが、つまり今回の結果におけるコーン大量利用個体は、農作物の存在を学習していて、毎年のように農地に出没し、コーンを利用していたものと考えられます。ただし、コーンに対する依存度は個体によって異なっており、全体の傾向としては草本や果実を主な食物資源にしている個体が多くを占めています。

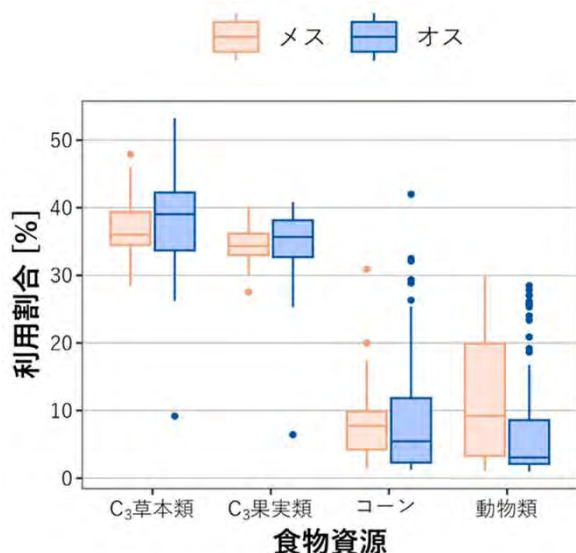


図2. 食物資源ごとの利用割合。コーンの利用割合は他の資源よりも低い傾向ですが、個体差が大きいことも分かります。

コーン利用個体は大きい

次に、ヒグマのコーン利用に影響する要因を、個体ごとの特徴（年齢および体サイズ）と捕獲地点の環境（人口および森林と農地の繋がり）に着目し調べました。しかし残念ながら、メスについては明確な結果が得られなかったため、ここではオスの結果のみを紹介します。

個体ごとの特徴を調べた結果、オスでは体サイズの大きい個体がコーンを多く利用していることが分かりました。この結果については2通りの解釈ができます。1つ目は、コーンが成熟する晩夏は、草本は低栄養、堅果は未成熟といった状態にあるため、この時期に栄養価の高いコーンを利用していた個体は体サイズを大きくすることができたという可能性です。もう1つは、クマ類ではより大きい個体が社会的に優位であることが知られているため、もともと大型の個体が他の個体よりも農作物を利用しやすかったという可能性です。今回の解析ではこれら2つの可能性を区別することはできませんが、農地によく出没している個体が大きいということが新たに分かりました。

オスのコーン利用には、捕獲地点の環境も影響していました。まず、人口に関しては、人の少ない地域でコーン利用が多くなるという関係性が確

認されましたが、恐らくヒグマが人の存在を避けた結果でしょう。また、森林と農地の繋がりについては繋がりが多い、つまり森林から農地へのアクセスが良い地域でコーン利用が多くなることが分かりました。実際に食害農地を視察すると森林に近い部分で被害が著しいことが分かりますし（図3）、GPS首輪を使った研究でも、ヒグマが夜間に森林から農地に侵入していることが報告されています。ヒグマは開けた場所を好まないため、農地に侵入する際もギリギリまで森林を利用していただと考えられます。渡島半島では農地と森林が複雑に入り組んでいるため、どうしても接している部分は長くなってしましますが、コーン畑をヒグマにとっての格好の餌場にしないためには、電気柵の導入や植生の刈り払いが重要になると考えられます。



図3. ドローンで撮影した食害農地の様子。コーンが虫食い状になぎ倒されていることが分かります。道路側（写真下側）よりも森林の際（左右上側）で特に被害が顕著です。

※特記事項

本研究は、JSPS科研費JP24580034および京都大学生態学研究センター共同利用・共同研究の助成を受けたものです。

もう少し詳しく知りたい方はこちら

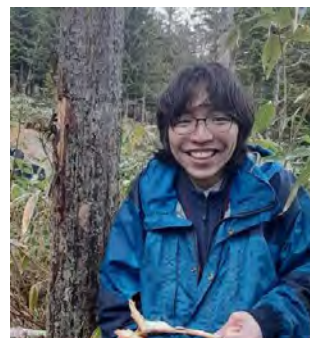
- ✓ Sakiyama, T., Morimoto, J., Matsubayashi, J., Furukawa, Y., Kondo, M., Tsuruga, H., Mano, T., & Nakamura, F. (2021). Factors influencing lifespan dependency on agricultural crops by brown bears. *Landscape and Ecological Engineering*, 17 : 351-362.

学生部会幹部の紹介

新年度に伴い、新メンバーが加入したJBN学生部会の幹事の自己紹介を掲載します！

代表：三枝 弘典さん（北海道大学 修士2年）

学生部会の運営に携わるようになってから、はや数年。気がつけば、こんな肩書きになってしまいました。。。近年はコロナ禍で行動が制限されてしまい、思うような活動ができずに悶々とした日々もありました。しかし、今年は活動の幅が広がった上に、学生部会幹部に積極的な新メンバーも増えたので可能性が無限です。学生会員の皆さん、一緒に学生部会を盛り上げていきましょう！



グッズ係：蜂矢 愛さん（東京農工大学 修士1年）

幼い頃から野生動物に憧れ、現在は野外で動物の研究をしています。この頃は、クマを見れば見るほど、描けば描くほど、愛らしく思えて仕方なく、クマグッズを見つけてはニヤニヤしています。

また、なかなか対面で集うことができない数年だったと思いますが、今後、グッズや対面イベントを通して盛り上げていけたらと思っています。皆さんとクマや動物についていろいろお話できることを楽しみにしています。よろしくお願いいたします！

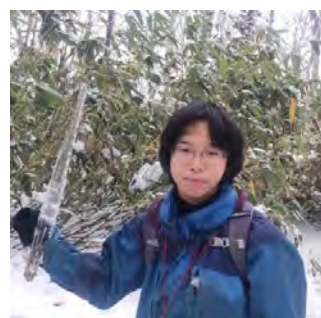


グッズ係：森好 水希さん（北海道大学 学部5年）

北大クマ研でサークルとしてヒグマを追ってきましたが、卒論でもヒグマの寄生虫をやることになりました。動物まみれの(と言うよりクマまみれの?)学生生活が進行中です。

ヒグマに限らず動物が大好きです。爬虫類も昆虫も古生物も何でもです！研究としても趣味としてもどんどん野外へ出て、本でしか知らなかった生き物や聞いたこともない生き物に会いたいです。

現在学生部会での対面イベントを企画中なので、皆さんと動物の話(その他関係ない話も)沢山できることを楽しみにしています。よろしくお願いいたします！



グッズ係：牧野 珠子さん（東京農工大学 学部4年）

今年度のグッズ係として、学生部会運営のお手伝いをさせていただきます。よろしくお願いいたします。

山の中で生きたクマにはじめて出会ってから、もうすぐ一年も経ちます。今年もあの黒くてまるい生きものに出会えると思うとたのしみで仕方ありません。



メーリングリスト係：吉竹 歩さん（東京農工大学 学部4年）

はじめまして。この度メーリングリスト担当をさせていただくことになりました。卒論はクマではなくカモシカをテーマにしています。JBNには最近入らせて頂きました。クマについてもまだ知らないことばかりですが、活動を通して精一杯学び、少しでも役に立てるよう頑張ります！よろしくお願いします！



会計係：安田 和真さん（東京農工大学 学部4年）

私はクマが種子散布やスカベンジングなどを通じて他の生物と密接に関わっている点に興味を持っています。研究自体はクマではないのですが、JBNの活動を通して知識を深めていきたいと思っています。今年度の抱負は、調査にひたすら行って調査地を知り尽くすことです。安全第一で頑張ります。学生会では企画を盛り上げられるよう精進しますので、ご都合のつく方はぜひご参加いただけると嬉しいです。いろいろな方と交流できることを楽しみにしています！どうぞよろしくお願いいたします。



JBN学生会交流会2023@札幌～交流の輪を広げよう～

コロナ禍から日常に戻りつつある現在、JBN学生会では大学を超えた学生同士の交流を促進したいと考え、対面イベントを企画いたしました。自身の調査地以外のフィールドに出向き、自身と異なる研究をする参加者と出会い対話することで、クマに対する知識や理解を深めるとともに、クマに関わる学生間のつながりを広げてみませんか？

日程：2023年9月19日(火)14:00～20日(水)18:00（20日夜に懇親会あり）

場所：北海道大学札幌キャンパス(近くの会場に変更の可能性あり)

および 札幌市南区のフィールド

参加資格：JBN学生会会員

募集人数：先着10名

参加費：保険料500円

※交通費、宿泊費、食費は自己負担となりますが、遠方からの参加の場合、交通費補助約5000円が出ます。（距離によって要相談）

イベント内容：自己紹介、JBNグッズ案オーディション、ヒグマの痕跡観察、学生の研究発表、懇親会など

お問い合わせ先：kieiropitamasirasu@gmail.com（牧野珠子）



お申込みはこちらから↓



Collection#022

BEARS WOOD PROJECT

BEARS WOOD PROJECT代表の吉田真理（よしだまこと）と申します。このプロジェクトは、以下の4名で活動しております。

株式会社四辻 代表取締役社長 四辻 誠悟（よつつじせいご）

株式会社堤浅吉漆店 専務 堤 卓也（つつみたくや）

スタジオホリゾント 取締役 亀村 佳宏（かめむらよしひろ）



弊社（吉田木工）は京都市右京区京北にあり、家具や木工製品の製作をしております。JBNの皆様には昨年当プロジェクトの映像制作に際してご協力頂き大変お世話になり有難うございました。また今回もこのような機会を与えて頂き感謝申し上げます。

まずはBEARS WOOD PROJECT（BWP）の発足の経緯と、私の思いのところを少しお話しいたします。

BEARS WOOD PROJECT

（クマハギに遭った木材に価値をつける）

森林で起きている様々な事柄に注目していると、クマが樹皮を捲る『クマハギ』と言うものを知りました。最初はクマの爪研ぎか、マーキングみたいなものかと勝手に想像していましたが、それは森に食べるものが少ないと考えられる時期に起こっており、樹皮の内側にある繊維や樹液を食している事が分かりました。全てのクマがする訳ではありませんが、それは生きる為に必要な事であることを知りました。

一方で、樹皮を剥がれた木は一旦、再生しようとはしますが、環境によってはそこから朽ちていく木もあります。それは、倒木や伐採時の危険が増す原因になり、更には、大切に育てられた木が木材としての価値をなくし、木材の生産現場ではマイナスでしかない事も分かりました。

『クマを害獣として捕らえる…果たしてそれで良いのだろうか。私たち人間も同じ様に自然から色々なものを頂いて生活している』

クマだけを悪者にしたくありませんでした。

『クマが選んだ美味しい木。クマが好むほどの良い木。この歯型や爪痕がついた木かっこいいよね…』
このように考えた事がプロジェクトの発足の経緯になります。

ベアーズウッドプロジェクトは、私たちのようにものづくりが好きな方々と一緒になって、その技術やアイデアで色々なアイテムを展開していきたいと考えております。

- ・林業の方々と連携しクマハギ材が放置されていく前に積極的に活用すること
- ・一般木材と変わらない価格で購入し林業の痛手にならないようにすること
- ・そして出来上がったものにその価値をつけていく

この3つの点を心掛けて活動しております。



代表 吉田真理氏

プロジェクトの紹介動画もあります！



作品介绍

サーフボード



BWPのメンバーに京都で100年以上続く堤浅吉漆店の4代目堤卓也氏がおります。彼が展開する木製のサーフボードブランド漆板と書いて『siita』があります。

サーフボードの機能性を考える過程に、材の軽さを求める傾向があります。一般的には桐材を使う事が多いようでしたが、特にクマハギされた杉材の繊維が壊れかけた部位はその特性にマッチしている事がわかり、更に仕上げに漆を塗りその耐水性や強度を上げる事ができます。そのことから彼らに材の提供が出来るようになりました。山と海を繋ぐそんなストーリーもsiitaの協力により実現した商品です。

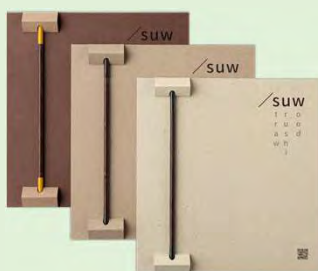


ボルダリングホールド

初めて山でクマハギされた木材を目にした際に、その変形した形・クマの爪痕・歯形からインスピレーションを受けたのがこのホールドでした。東京オリンピックでの日本人の活躍は記憶に新しく、スポーツクライミングという言葉まで生れたように、様々な施設の壁を利用してボルダリングを計画する動きがあります。



写真は昨年京都市内の保育園様に設置したホールドになります。樹脂でできた量産のホールドとは違い、同じホールドは一つとない。温かみがあり木でできているので、子供たちも安心して使用できます。形や形状も非常に面白く、好評をいただいております。このホールドにも塗装に漆を採用し、環境にやさしく、万が一、木材に割れや破損が見られた際は修復し使い続けられるホールドに仕上げました。



/suw 漆と木のストロー（使い続けるってすばらしい）

マイクロプラスチック問題を受けて、木のストローを採用する動きが進んでいますが、耐久性に難があり、使い捨てされるケースが多いのが現状です。

私たちは、この素晴らしい取り組みを無駄にせず、より継続性のある動きにするために、こちらにもクマハギ材を使用し、漆によって耐水性と機能性を高め、大切に使い続けることの出来る漆と木のストロー『/suw』スウを制作しました。

スケートボードやハンドプレーンなども！



紹介映像はこちら！

“クマと共に生きていく”という想いがこもったプロジェクトとその作品たち、是非チェックしてみてください★



地域のクマ類はどのような方針で保護管理されているのか！？



— 第一種計画・第二種計画 —

島根県 石橋 悠樹

日本に生息するクマ類は鳥獣法や特定鳥獣保護管理計画を基本として、保護や管理（個体数調整・被害対策など）がされています。特定計画には現状や今後の対策方針など、具体的な対策方針などが記載されています。今回は普段ではあまり目にする事のない特定計画について解説します。

日本に生息するクマ類などの野生動物は、鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律（以下、鳥獣法）により、保護・管理がされています。具体的な保護管理の方針として、環境大臣が基本指針、都道府県知事が鳥獣保護事業計画を策定しています。

野生鳥獣にはツキノワグマなどのように地域的に個体数や分布域の減少している種がいる一方、イノシシやシカなどのように生息数や生息域の拡大により生態系や農林水産業等へ深刻な被害を与えている野生鳥獣も生息しています。そのような野生鳥獣と人との軋轢を解消するとともに、**長期的な野生鳥獣の保護管理を図ることを目的として、特定鳥獣保護管理計画**（以下、特定計画）が設けられています。特定計画が策定されている野生動物にはヒグマやツキノワグマ・ニホンジカ・イノシシ・カワウなどがあります。

特定計画には、環境大臣が定める希少鳥獣保護計画・特定希少鳥獣管理計画、都道府県知事が定める**第一種特定鳥獣保護計画**（以下、保護計画）・**第二種特定鳥獣管理計画**（以下、保護管理計画）の4種類があります（図1）。特定計画は基本的に5年を1期として策定されており、第〇期計画（更新のたびに〇の数字が増加）と呼ばれています。都道府県が特定計画の策定や改定を行う際には、一般に広く意見を聴取するためにパブリックコメントが募集されます。パブリックコメントはHPで質問・回答内容が公開され、特定計画の修正に用いられることもあります。

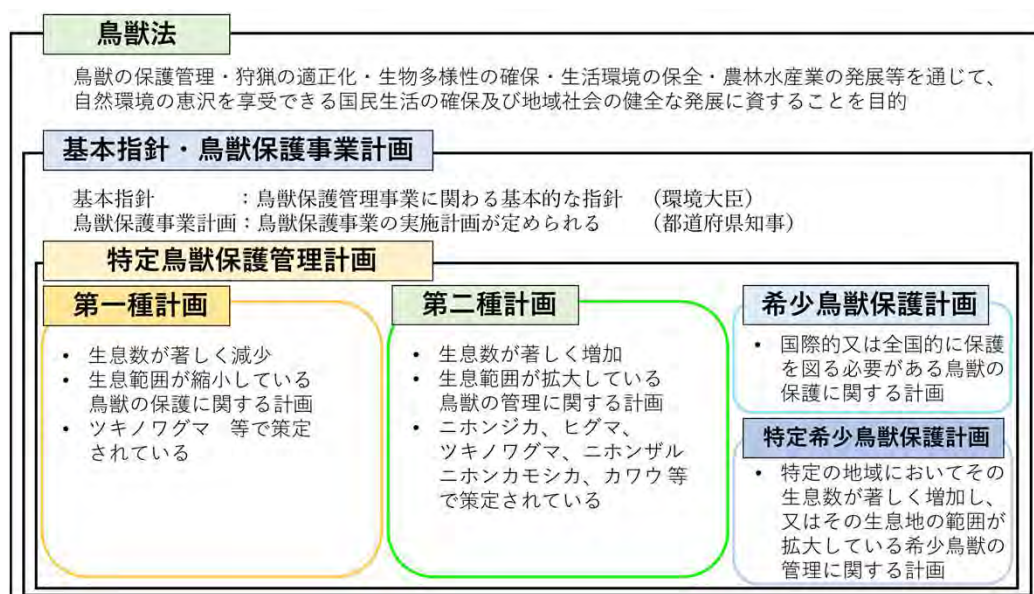


図1. 鳥獣法・基本指針・特定計画

クマ類においては、**生息数が著しく減少**し、又はその**生息地の範囲が縮小**している鳥獣の保護に関する計画（**第一種計画**）と、**生息数が著しく増加**し、又はその**生息地の範囲が拡大**している鳥獣の管理に関する計画（**第二種計画**）が策定されています。令和5年5月現在、第一種計画は3県、第二種計画は19道県、任意計画・指針・マニュアルは11都府県で策定されています（図2）。

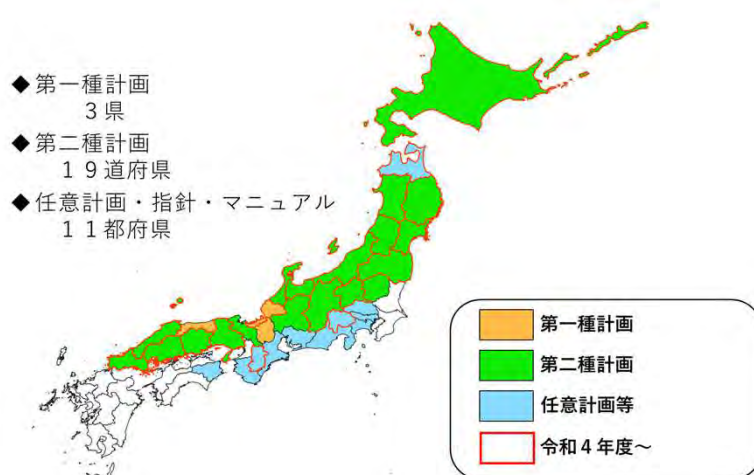


図2. 特定計画・任意計画を策定している都道府県

特定計画の具体的な事例（島根県）について紹介します。西中国地域（島根県・広島県・山口県）のツキノワグマは他地域から孤立して分布しており、絶滅が危惧されていたことから、1944年以降は環境省より狩猟禁止措置が発令されています。ツキノワグマの個体群を将来的に維持するため、3県共通で保護計画（第1期）が策定されました。保護計画ではイノシシなどの錯誤捕獲防止対策や奥山放獣・貸出用電気柵などの被害対策や学校などへの普及活動などが実施されてきました。

一方、人里付近への出没など、人とクマの軋轢が増加してきたことから、クマの被害対策が問題となってきました。そのため、平成29年度からゾーニング管理（保護地域・緩衝地帯・排除地域）を行うことにより、人とクマのすみわけを強化するような対策が実施されています（図3）。対策の一つとして、秋季（特に堅果類の不作年）にはカキなどの放任果樹にクマが多数出没するため、放任果樹除去事業が実施されています。

令和2年度に3県で実施した調査では、生息数・分布域ともに安定的な状態であり、個体群の危機的な状況は脱したと推定されています。そのため、令和4年度からは第二種計画が策定され、クマの保護管理が行われています。



図3. クマ類のゾーニング管理

出典：実効性のあるこれからのクマ類の保護・管理のために 平成 28 年度特定鳥獣保護・管理計画作成のためのガイドライン（クマ類編概要版）（環境省）

特定計画は普段目にとめる機会が少ないと思いますが、この機会に自分の住んでいる地域のクマがどのように保護管理されているのか、一度ご確認ください。



地球環境基金助成活動の内定 四国のクマ保全戦略の作成に向けた取り組みが始動

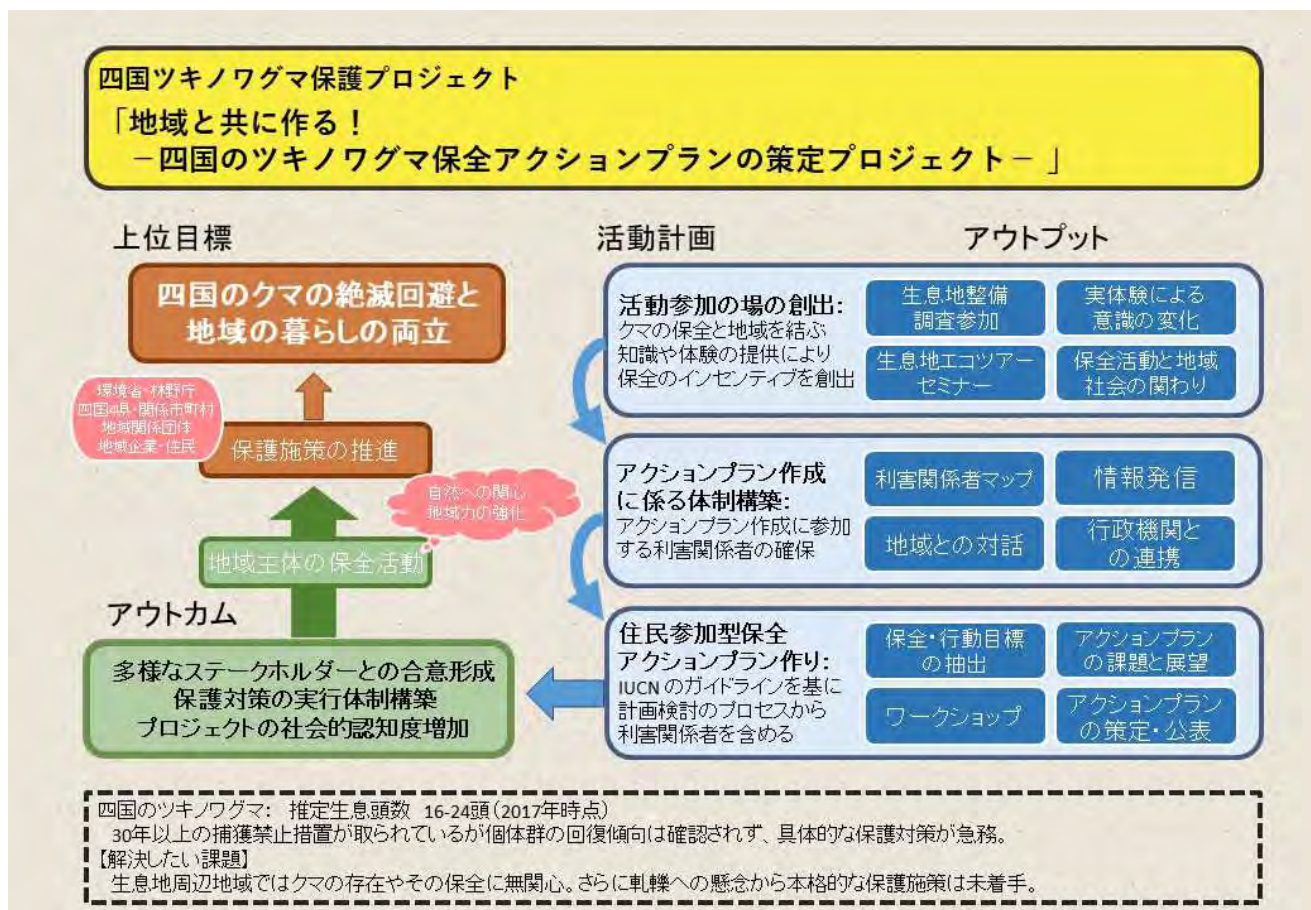
安藤 喬平（NPO法人 四国自然史科学研究センター）

今年度からの3年間、新たに独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金を受け、民間主導で保全戦略（保全アクションプラン）を策定するための取り組みを始動することとなりました。なかなか本格的な保護施策が進まない現状を打破するため、地域との合意形成を経た保全アクションプランを民間主体で先行的に作成し、世に提示することで、関係機関による取り組みを後方支援できればと考えています。

アクションプランの作成方法は、IUCNが提唱する作成プロセスに則り、専門家、NGO、地域住民、関係行政機関などの様々なステークホルダーを巻き込んだ大規模なワークショップを開催し、必要とされる各保全策は主にワークショップ参加者との議論により決めていきます。このプロジェクトで目指す形としては、クマ類

では台湾のツキノワグマ、国内ではオガサワラカワラヒワなどで事例があります。これらの事例の情報収集を行っていますが、特にワークショップの準備から開催、取りまとめまで、非常に大変な作業が待っているようです…。しかし、軋轢対応が最重要であるクマ類の保全において、多数の地域住民が参加・議論するワークショップを経て計画が合意されることは、その成果物には大きな実行力・説得力が伴うことを意味します。3年後にどのようなアクションプランが出来ているのか、大きな不安もありつつ、この地域のクマの保全活動に楔を打つことができることは間違いないと期待しています。

JBNに在籍する皆様には、専門的・技術的な部分でご協力をお願いすると思いますが、ぜひともよろしくお願いいたします。



事務局からのお知らせ

1. 事務局連絡先

- 日本クマネットワーク（JBN）に関する各種問い合わせ先は、事務局：info@japanbear.orgまでお願いいたします。

事務局所在地

〒060-0818 北海道札幌市北18条西9丁目
北海道大学大学院獣医学研究院
野生動物学教室 下鶴 倫人

2. 会費納入のお願い

- JBNの活動は、主に会員の皆様からの会費でまかなわれています。
規約により、**会費は前納制（2023年度会費は2023年3月31日までに納入）**となっております。
未納の方は急ぎお支払いをお願いします。ご理解とご協力をお願いいたします。

【2023年度会費】

- **学生会員 2,000円／年**（小学～高校、大学、大学院、専門学校生）
*学生でなくなる方は正会員への切り替えをお願いします。
- **正会員 3,000円／年**（学生会員以外）

- 会費納入状況は本誌発送に用いた封筒の宛名ラベルに記載されています。

- **2年以上会費未納の方には、未納分が納入されるまでニュースレターの発送を休止致します。**
また、**3年以上会費未納の場合には自動退会**となり、**未納分を納入しなければ再入会できません**のでご注意ください。

- **複数年まとめでの振込やクマ基金（一口1,000円）へ寄付される方は、振込用紙の備考欄に記載または事務局へお知らせ下さい。**

- 会費に関するお問い合わせは事務局まで、お願いいたします。

お振込先

郵便振替口座：日本クマネットワーク

■ゆうちょ銀行からのお振込

口座番号：00130-1-666956

■その他の銀行からのお振込

金融機関名（コード）：ゆうちょ銀行（9900）

支店名（支店番号）：^{ゼロイチキョウ}〇一九 店（019）

預金種目：当座

口座番号：0666956

3. 住所変更および退会等のご連絡のお願い

- 住所、所属、メールアドレスなど**会員名簿登録内容に変更のある方・諸事情により退会を希望される方は必ず事務局へお知らせください。**
- 連絡方法は、上記のJBNのウェブサイトの問い合わせフォームからお願いいたします。
- 会費納入時に**振込用紙の通信欄に事務局への連絡事項（住所変更、退会希望など）を記載しても変更手続き等は行われません。**



一度でもニュースレターが宛先不明で返送された方には、次号からの発送を停止しています。住所変更はお早めにお知らせください。



新年度になり、住所等の登録情報が変わる方は、事務局までお知らせください！

4. メーリングリスト（ML）登録状況確認のお願い

- 入会時にメールアドレスを登録しているはずなのに、MLからの情報が届いていないという方がいらっしゃいましたら、上記事務局宛に氏名と登録希望メールアドレスを明記して、E-mailにてご連絡いただきますようお願いいたします。

vol.24 - 1 Contents

Bear Scene 「ミズバショウを食べにきたヒグマ」 大石 智美さん	1
今号の表紙イラスト 「クマ事情 in Japan」 蜂矢 愛さん	1
People 後藤 優介さん（茨城県自然博物館）	2
This number 2022年度のクマ事情	4
Letters from 「第14回北海道の今後のヒグマ研究を考えるワークショップ」に参加して	19
開催報告「クマにかかわる普及啓発を实践する人材育成ワークショップ in 盛岡」	20
クマ研究れば 35. 崎山 智樹さん「デントコーンを食べるヒグマ」	21
JBN cubs 学生会幹部の紹介	23
今号の逸品 「BEARS WOOD PROJECT」	25
被害対策ミニコーナー 「地域のクマはどのような方針で保護管理されているのか!？」	27
四国のミニコーナー「地球環境基金助成活動の内定」	29
事務局からのお知らせ	30

●編集員のくまエッセイ●

初めまして、東京農業大学大学院の竹腰直紀と申します。
酪農学園大学の菊地さん、編集長の伊藤さんからお声掛けいただき、前号からニュースレターの編集委員に加わりました。

本格的なクマの調査研究に参加するようになったのは学部生の卒論研究からで、当時は初めての経験に心躍らせていました。ただ、当たり前ではありますが、調査は体力勝負のルーティンワークを地道にこなす日々で、どちらかと言えばつらい思い出だったように思います。今は大学院に進み、引き続きクマの生態研究に取り組んでいますが、正直、調査がつらいのはあまり変わらないかもしれません（笑）。しかし、クマの痕跡を見つけた時、調査でのちょっとした発見をしたときに感じる好奇心や感動は、年々増していったように感じます。

そんな大学生活を送っていると、どうしても外との繋がりが希薄になりがちですが、JBNのニュースレターはクマ界隈のより一般に開けた話題やトピックに気軽に触れられる貴重な存在だと感じています。まだまだ至らぬ部分が多いかと思いますが、精一杯ニュースレターに貢献していきたいと思っています。



JBNニュースレター編集委員会
竹腰 直紀



Bears Japan Vol.24 No.1 2023. June.

JBNニュースレター編集委員会：伊藤 哲治・石橋 悠樹・安藤 喬平

・中島 彩季・三枝 弘典・長沼 知子・菊地 静香・竹腰 直紀・蜂矢 愛



JBN
Japan Bear Network

編集部(e-mail)：bj@japanbear.org

表紙イラスト：蜂矢 愛

印刷：株式会社 プリントバック

発行：日本クマネットワーク